

尾西株子株式会社  
 社長 青樹 英二  
 右代任人  
 東京市麹町区内幸所二丁目二番地  
 土田 政行

皇太子 林有造 殿

明治三十三年二月二日 内閣書記官

内閣總理大臣 内閣書記官長

外務大臣	陸軍大臣	司法大臣	農商務大臣
西	五	区	水
大藏大臣	海軍大臣	文部大臣	逓信大臣
五	権	区	区

別紙逓信大臣請議海外航路保護ニ関スル  
 方針ノ件ノ案ヌルニ

第一日本郵船株式會社ノ歐州航路並來

國航路及東洋汽船株式會社ノ米國航  
路ニ對シテハ

甲、船舶寄港地等ハ「シャートル」線ヲ除  
クノ外成ルヘク各社現行ノ條件ヲ變更  
セヌ

乙、助成金下付ノ期間ハ十個年間にトス

丙、助成金額ハ助成開始ノ時ニ於テ現  
行航海奨励法ニ依リテ當然受クヘキ  
奨励金ト同一ノ額ヲ該期間ヲ通シテ  
下付スヘシ

ノ條件ヲ以テ特別助成金ヲ下付シ

### 第二 航海奨励法ニ對シテハ

甲、明治三十二年十月已後帝國船籍

ニ登録スル外國製造ノ船舶ニハ奨励  
金ノ半額ヲ支給スルコト

乙、本法施行期間ヲ該法施行後十八個  
年ニ限ルコト

ノ三點ニ向テ改正ヲ加ヘント云フニアリ

右大體閣議ニ於テ御採用ノ上ハ航海奨励法  
中改正案ハ法制局ノ審査ニ付セラレ然ルヘシ

指令案

海外航路保護ニ関スル方針ノ件請儀ノ  
通

明治三十三年二月十日

秘發第一五四号

海外航路保護ニ關スル方針ノ件

政府ノ明治廿九年ニ於テ航海獎勵法ヲ  
制定スルヤ日本郵船株式會社ハ乍テ

横濱ヲアレントウワフ線及香港ヲシヤトル線

ヲ開始シ東洋汽船株式會社ハ桑港線ハ

ソーム線及紐育線ヲ開始センコトヲ計

畫シ其ノ他海外航路創設ノ企勃然トシ

テ起レリ其ノ間國家經濟ノ變調ヲ呈スル

ニ際シ本件ノ處理ニ關スル廟議モ亦多少

甲

ノ變遷ヲ免レサリキ航海獎勵法ヲ改正シ  
成ル可ク獎勵金ノ支出ヲ節減シ以テ前  
記郵船會社ノ歐米二航路ヲ助成セント  
シタルハ明治三十年第十回帝國議會ニ  
提出シタル法案及豫算ノ要旨ナリ然ルニ  
本件ハ議了ニ至ラスシテ議會ハ閉會ヲ告ケ  
タリ同年第十一回帝國議會ノ開會ニ當  
リテモ政府ハ前期ト全一ノ方針ヲ採用シ唯  
東洋汽船株式會社ノ新設航路ヲ加ヘ歐  
米三航路ヲ助成セントシ又衆議院ノ解

散ニ遭遇シ議決ヲ告ケスシテ罷ム次テ客  
年ニ至リ第十二回帝國議會ニ際シ政府  
ハ會期ノ短カキカ為メ單ニ航海獎勵法ノ  
改正ニ關シテ前議ノ一部ヲ襲蹈シタリ然  
ルニ衆議院ハ再ヒ解散ヲ命セラレテ獎勵  
法ノ改正ハ終ニ遂行セラレス歐米及東洋  
諸航路ニ使用セラレ獎勵金ヲ受クル所ノ  
船舶ハ二十三艘ヲ計フルニ至ル今日ノ現  
狀即チ是ナリ今ヤ第十三回帝國議會  
ニ對シ政府カ本件ニ對スル主義ヲ確立ス

ル、洵に刻下ノ急務ナリト信スルヲ以テ  
左に本大臣ノ視ル所ヲ具陳シ以テ閣議  
ヲ仰カント欲ス

本件ヲ決定スルニ當リテハ左記二項ヲ調  
査スルコトヲ要ス

第一日本郵船株式會社、從事スル歐州  
航路並に東洋汽船株式會社ノ開始セ  
ル米國航路ハ國庫ヨリ特別ノ助成金ヲ  
下付スルコトヲ要スルヤ否ヤ

第二航海獎勵法ハ改正スルコトヲ要スルヤ

否ヤ

第一凡ソ船舶ノ航路ニシテ國家ノ交通貿易  
易若クハ外交ニ密接ナル關係ヲ有スルモノハ  
國道トシテ常ニ之ヲ占有スルハ止ヲ得サル  
ノ事ナリトス故ニ國庫ハ特ニ其ノ業務ヲ保護  
シテ之カ扶植ヲ謀リ且ツ嚴正ナル條件ヲ定  
メテ之ヲ監督セサルヘカラス彼ノ泰西諸國  
カ各、國內ノ有力ナル海運會社ト契約ヲ  
締結シ之ヲシテ定期航海ヲ維持セシムル取  
以ノモノ皆此ノ理由ニ外ナラス我國ニ於テモ

往時航海ノ尚ホ未タ發達セサル時期ニ當  
リ政府カ郵船會社及商船會社ノ内國沿  
岸航路ヲ保護シ次テ支那朝鮮及露領  
亞細亞ノ沿岸ニ及ホシ近時更ニ濠州孟買  
及長江等ノ航路ヲ開始セシモノモ亦國家ノ  
進運ニ伴フテ漸次我航權ヲ遠洋ニ伸暢ス  
ル所以ニアラサルナシ

惟フニ明治廿七八年ノ戰役以來帝國ト歐米  
諸國トノ關係ハ日ニ月ニ密通シ復タ舊態  
安スハカテサルモノアリ從テ歐米航路ノ如キ

モ業ニ已ニ一己營利ノ業トシテ之ヲ看過ス  
ヘカラス所謂國道トシテ維持セサルハカラサ  
ルノ氣運ニ際會シタルモノトス

然レトモ歐米航路助成ノ事タル財政上頗  
ル偉大ノ計畫ニ屬シ之カ航路ノ選定助成ノ  
金額其他各般ノ條件ニ付テハ慎重審議  
ヲ要スルハ素ヨリナリ今左ニ各社請願ノ要  
領ヲ掲ケ之カ適否ヲ討究セントス

日本郵船株式會社ノ歐州航路ハ總噸數  
平均六千百九十七噸最強速力拾四海里

ヲ有スル船舶拾貳艘ヲ以テ每貳週壹回横濱及「アントウワープ」雙方ヲ發航スルモノトシ之ニ對シ十五個年間助成金年額貳百六拾七萬參千八百九拾四圓拾八錢四厘ヲ要スト謂フ此ノ金額ハ航海獎勵金ニ準據シテ算出シタルモノナルヲ以テ新造船船ノ年齡五年ヲ經過セサル間ハ二者ノ間ニ生スル差額ハ僅少ニ過キス該年齡ヲ經過シテヨリ以後年々増加シテ十五個年間ノ差額ヲ通算スレハ壹千零參拾萬六千六百拾四圓

五拾六錢六厘ト成ル又米國航路ニ對スル當初ノ計畫ハ總噸數五千六百參拾噸最強速力十五海里ノ船舶參艘ヲ以テ每四週壹回香港及「シアトル」雙方ヲ發航スルモノトシ之ニ對シ十五個年間助成金年額五拾九萬參千貳百四拾壹圓五拾四錢五厘ヲ要スト謂フ此ノ金額モ亦當初五箇年間ハ航海獎勵金ト同一ノ額ナリトス然ルニ其ノ後ノ實驗ニ依リ右ノ計畫ニテハ收支相償ハサルコトヲ知り更ニ其ノ規模ヲ縮小シ

總噸數三千五百噸平均速力拾壹海里ヲ  
有スル船舶三艘ヲ使用スルコト、レ之ニ對シ  
尚ホ前顯ノ助成金ヲ要スト謂フ、至レリ故ニ  
其ノ獎勵金ニ對スル差増ハ當初五箇年間  
ニ於テ既ニ百七拾五萬八千六拾八圓九拾七  
錢五厘ト成リ十五箇年ヲ通スレハ五百九拾  
參萬八千六百八拾參圓貳拾參錢五厘トナル  
東洋汽船株式會社ノ米國航路ハ總噸數  
六千噸最強速力十七海里ノ船舶三艘ヲ以  
テ香港桑港間ヲ往復スルモノトシ之ニ對シ

獎勵金ノ適減ヲ加ヘサル金額ヲ助成金ト  
シテ十五箇年ヲ通シテ支給セラレシコトヲ要  
スト謂ヒ其ノ他ノ條件ヲ具セス試ニ毎年十  
六回ノ航海ヲ為スモノト假定シ右ノ助成金  
ト獎勵金トノ差額ヲ算スルニ當初五箇  
年間ハ其ノ間ニ差異ナキハ勿論ナレトモ  
第六年ヨリ第十五年ニ至ル拾箇年ノ差  
額ハ參百拾八萬六千四百八拾圓ト成ル  
之ヲ要スルニ日本郵船株式會社ノ歐州航  
路及東洋汽船株式會社ノ米國航路ハ



共ニ獎勵金ノ船齡五年以内ニ對スル定率  
ヲ拾五個年間ニ通シテ支給セラレシコトヲ  
願フニ過キス獨リ日本郵船株式會社ノ米  
國航路ハ當初ニ於テハ獎勵金額ヲ以テ從  
事セント試ミタルモ中ゴロ其ノ規模ヲ小  
シ而シテ之ニ對シ一箇年平均獎勵金ニ比  
シ參拾九萬五千九百拾貳圓貳拾錢五厘  
ヲ増加シタル金額ヲ助成金トシテ支給セ  
ラレシコトヲ要スト謂ヘリ  
今若シ前示請願ノ全部ヲ採納スルニ於テ

ハ國庫ハ毎年平均獎勵金ニ比シ百貳拾  
九萬七千四百五拾壹圓八拾五錢參厘ヲ  
増加シタル金額ヲ支出セサルヘカラス其  
ノ十五箇年ノ差増ヲ積算スレハ實ニ千九  
百四拾六萬壹千七百七拾七圓八拾錢壹  
厘ノ巨額ニ上ラントス且各航路ノ營業ハ  
日尚ホ淺ク皆現ニ經驗的時期ニ屬スルヲ  
以テ今全然各會社ノ願意ヲ納レ長期ニ  
亘ルノ契約ヲ為スハ策ノ得タルモノニアラス  
依テ助成ノ期間ハ十箇年トシ香港ヲシヤトル

線、新、三千五百噸以上最強速力十  
 五海里以上、船舶三隻ヲ備ヘシメ其ノ他  
 ノ航路ニ在テ成ヘク現行ノ條件ヲ採用  
 シ助成方法、各航路助成開始ノ時ニ於テ  
 現行航海獎勵法ノ規定ニ依リ當然受ク  
 ヘキ金額ヲ該期間ヲ通シテ支給スルヲ可  
 ナリトス假、十箇年ヲ通シ助成金査定額  
 ト獎勵金額トノ差額ヲ舉クレハ左ノ如シ  
 一 歐州線 (二十六航海)  
 査定額 二六、七三、八九、四一、八四〇

獎勵金 二三、七四、六四、六一、一六二  
 差 二、九九、二、四八〇、六七八  
 二 桑港線 (十四航海)  
 査定高 一〇、一三、八〇、〇〇、〇〇  
 獎勵金 九、三七、八、三九〇、〇〇〇  
 差 七六〇、四一〇、〇〇〇  
 三 シヤトル線 (十三航海)  
 査定高 三、一七、九、三一、二、五〇〇  
 獎勵金 二、九四〇、八六四、〇五四  
 差 二、三八、四四八、四四六

四三航路差額合計

三九九一、三三九、一三四

前記各線、内歐州線及桑港線、在テ使  
用船舶其、他ノ條件トモ大体明治三十  
年第十一回帝國議會ニ提出シタルモノ、  
異テス獨リコシヤトル線ニ至テハ爾來請願  
者ニ於テ著シク當初ノ規模ヲ縮小シ尚ホ  
且ツ前願ト全一ノ金額ヲ支給セラレシムトシ  
欲スルモノナルヲ以テ全然其ノ請意ヲ採納  
スヘキニアラス依テ該航路ノ現状並國家

有事ノ日ニ於ケル必要ヲ酌量シ其總噸數  
ハ出願ノ如ク止メ最強速力ヲ十五海里  
ト為サシメ之ニ對シ現行航海獎勵法ニ依  
リ新造初年ニ於テ當然受クヘキ金額ヲ  
十箇年間ヲ通シテ支給セントス是レ前記  
ノ如ク査定シタル所以ナリ  
第二航海獎勵法ヲ改正スヘントノ說ハ同  
法發布後數月ナラス未タ其ノ實施ニ至  
ラサル時ニ於テ既ニ唱道セラレタリ是レ主  
トシテ財政上ノ着眼ヨリ生シタルノ說トス

當時戰勝ノ餘朝野翕然トシテ海運事  
業ノ忽諸ニ付スヘカラサルヲ悟リ航海獎  
勵法ノ制定ハ恰モ其ノ機會ニ投シタルヲ  
以テ日本郵船株式會社ハ明治廿九年六  
月資本金八百八拾萬圓ヲ増加シテ貳千  
貳百萬圓トナシ次テ大阪商船株式會社  
モ資本金貳百五拾萬圓ヲ増加シテ壹千  
萬圓ト爲シ又東洋汽船株式會社ハ六百  
五拾萬圓ノ資本ヲ以テ新ニ設立セラレ皆  
快駛ノ大船ヲ新造シテ海外航路ヲ開カ

シコトヲ期セリ是ニ於テカ或ハ航海獎勵  
金ノ鉅額ニ上リ財政上權衡ヲ失スル虞  
アルコトヲ憂ヒ獎勵法ノ改廢ヲ議スル者  
アルニ至ル當時當省ハ以テ遠洋航海  
ノ事業タル頗ル偉大ノ經營ニ屬シ其ノ起  
業ノ果シテ遂行セララルヤ否ヤ疑ナキ能ハス  
慎重以テ事態ヲ觀察セサル可ラスト後日  
本郵船株式會社ハ歐米航路ニ對シ特別  
助成ノ事ヲ出願シ東洋汽船株式會社モ  
亦米國線ニ對シ之ヲ申請セリ是ニ於テ航

海獎勵法改正ノ事ハ其ノ趣ヲ一變シ曩  
ニ單ニ獎勵金ノ鉅額ニ上ルヲ制限スルノ  
目的ヲ以テ之カ改正ヲ議シタル者今ヤ獎  
勵金ヲ移シテ助成金ト為サレト試ムルニ至  
レリ要スルニ獎勵法改正ノ議ハ法其ノ物ノ  
規定ヲ調査シ又其ノ施行ノ結果如何ヲ  
覩テ而シテ後決定シタルノ說ニアラスシテ或  
ハ財政ノ緊肅或ハ特別助成ノ請願等外  
圍ノ事情ノ為メ起リタルモノ外ナラス故  
ニ其ノ改正ノ要點ヲ舉グルハ概畧左ノ如ク

ニシテ表面ニ各種ノ理由アルカ如シト雖モ  
皆獎勵金ノ節減又ハ流用ヲ目的トセサルモ  
ナシ

一外國諸港ノ間ノシテ航海スル船舶ニハ  
獎勵金ヲ下付セサルコト、スルコト

右ハ帝國ノ通商貿易ニ利益ナシト謂フニ  
在レトモ東洋沿岸ノ各港間ノ航海ノ如キ  
ハ決シテ利益ナシト云フヲ得サルヘシ長江  
及滬蘇杭間ノ航路ノ如キハ既ニ助成金ヲ  
モ下付スルニアラスヤ又帝國ノ船舶カ太西

洋若クハ地中海ノ如ク限リテ航海スルカ  
如キ場合ニ於テハ始メテ前示ノ理由ヲ應  
用シ得ヘント雖モ此ノ如キハ或ハ之ヲ幾十  
年ノ後ニ期スヘキモ現時ニ於テハ之ヲ夢  
想スル能ハサルナリ

二獎勵法ノ發布ニ賴リテ外國ニ注文レタ  
ル船舶ヲ除ク外將來外國製造ノ船舶  
ニハ獎勵金ヲ下付セストスルコト

右ハ外國製造ノ船舶ヲ内國製造ノ船舶ト  
同一ニ待遇スルハ帝國ノ造船事業ヲ獎勵

スル所以ニアラス造船獎勵法カ航海獎勵  
法ニ以テテ其ノ效果ノ顯著ナラサル故ナレ  
トセズ故ニ航海獎勵法ヲ唯一ノ目的トシテ  
既ニ外國ニ注文レタル船舶ハ姑ク除キ將  
來向テハ外國製造ノ船舶ニ獎勵金ヲ與  
ヘサルコト、為スヲ要スト謂フニ在リ此說  
ハ將來帝國ノ海外航路ニ使用スヘキ船舶  
ハ業ニ已ニ外國ノ製造ヲ仰クニ及ハス少シク  
内地ノ造船業者ヲ獎勵スレハ即チ可ナリ  
トノ意見ヲ根據トセサルヘカラス帝國ノ

造船事業ヲ斯ノ如キ進歩シタルモノト認  
ムルハ速了ノ見タルヲ免レス造船奨励法  
發布以前ニ在テハ千噸少餘ノ船舶力帝  
國ノ造船所ニ於テ製造セラレタルモノ僅々  
二三隻ニ過キス又奨励法發布以後ニ於テ  
一躍シテ六千餘噸ノ大船ヲ製造シタルノ決  
事アリシモ是レ持一ノ三菱造船所ニ向テ  
稀ニ期スヘキノミ其ノ他神戸ニ於テモ稍大  
船ヲ製造スルコトヲ得ルニ至リシモ此等  
少数ノ造船所ハ到底我船舶ノ需用ヲ充ス

スニ足ラス故今日ニ於テ絶對的ニ外國製  
造ノ船舶ヲ拒絶セントスルハ早計ノ議ヲ  
免ルニ能ハサルノミナラス延テ航路ノ擴張  
ヲ萎靡セシムルノ虞ナキヲ保セス然レトモ  
造船奨励法發布以後ニ係ル我造船業  
ノ狀況ヲ以テ之ヲ其ノ以前ニ比スレハ漸次  
進歩ノ途ニ向ヒツアルハ争フヘカラサルノ  
事實トス故今日ノ現況ニ應スルノ策ハ  
一方ニ於テ外國製造ノ船舶ニ對シテハ尚ホ  
輸入ノ門戸ヲ啓キ他方ニ於テハ之ニ適當

ノ制限ヲ加ヘテ我造船事業ヲ鼓舞シ同  
時ニ財政ノ緊肅ヲ講スルニ如クハナシ即チ  
佛國舊法ノ主義ニ倣ヒ外國製造ノ船舶  
ニ半額ノ獎勵金ヲ与フルノ制ヲ採ルコト是  
ナリ

三 總噸數五百噸ヲ増ス毎ニ獎勵金定率  
ノ百分ノ十ヲ増加スルノ制ヲ廢スルコト  
方今各國競フテ大船ヲ製造スル場合ニ當  
リ大船ノ製造ニ特殊ノ獎勵ヲ加フルノ要  
否ハ多言ヲ要セスレテ明ナリ

四 法律ノ實施期間ヲ定ムルコト  
此ノ詔ニ獎勵法ハ固ヨリ永久ニ施行スヘキ  
性質ノモノニアラス故ニ實施期間ヲ定メ  
當業者ヲレテ安レテ計畫スル所アラシム  
ヘシト謂フニ存ス  
是レ洵ニ着實ナル見解ナリトス何トナレハ  
本法ニ素ヨリ一時ノ獎勵策タルニ過キス故  
ニ實施期間ヲ豫定シ當業者ヲレテ前途ノ  
目的ヲ確立セシメ同時ニ財政計畫ノ標準  
ヲ定ムルヲ得レハナリ



以上畧述レタル所ニ依リ本議ノ要旨ヲ舉  
クレハ左ノ二點ニ歸ス

一次ニ掲クル條件ヲ以テ日本郵船株式會  
社ノ歐州航路並米國航路及東洋汽船  
株式會社ノ米國航路ニ特別助成金ヲ  
下付センコトヲ要ス

甲、船舶寄港地等ハコシヤトル線ヲ除クノ  
外成ヘク各社現行ノ條件ヲ變更セス

乙、助成金下付ノ期間ハ十個年間にトス  
丙、助成金額ハ助成開始ノ時ニ於テ現行

航海獎勵法ニ依リテ當然受クヘキ獎  
勵金ト同一ノ額ヲ該期間ヲ通シテ下  
付スヘシ

二次ニ掲クル二點ニ付テ航海獎勵法ニ改正ヲ  
加フルヲ要ス

甲、明治三十二年十月已後帝國船籍ニ  
登録スル外國製造ノ船舶ニ獎勵金ノ  
半額ヲ支給スルコト

乙、本法施行期間ヲ該法施行後十八個年  
ニ限ルコト

本議ニシテ可決セハ前記第一點、付テハ別紙第一号命令書要領ニ依リ更ニ當業者ノ意見ヲ徴シ實踐ノ見込確定シタルトキハ歐州線並桑港線ハ明治三十三年一月一日ヨリ又「レヤト」ル線ハ新造船舶帝國船籍ニ登録ノ時ヨリ施行ノ積ヲ以テ豫算外國庫ノ負擔ト為ルヘキ契約ヲ為スノ件ニ關シ本期帝國議會ノ協賛ヲホメ第一點、付テハ別紙第二号案ニ依リ航海獎勵法中改正法律案ヲ本期帝國議會ニ

提出セラレシコトヲ望ム

右参照書類ヲ添ヘ閣議ヲ請フ

明治卅二年二月一日

逋信大臣子爵芳川顯



内閣總理大臣侯爵山縣有朋殿

命令書摘要

一 契約期間 十箇年

一 航海線路 歐洲線、香港桑港線及香港シヤトル線

一 船舶 歐洲線 総噸數六千噸以上 最速力一時  
間十四海里以上、又ノ十二艘

香港桑港線 総噸數六千噸以上 最速力

一時間十七海里以上、又ノ三艘

香港シヤトル線 総噸數三千五百噸以上

最速力一時間十五海里以上、又ノ三艘

歐洲線 毎二週一回一ヶ年二十六航

一 航海度數 香港桑港線 毎四週一回以上一ヶ年通レテ

十四航

香港シヤトル線 毎四週一回一ヶ年十三航

十四航

海

一 航海日誌

政州線 往航神戸ヨリ馬耳塞マテ四十二日以内復航「アントワープ」ヨリ神戸マテ四十七日以内

香港桑港線 往航横濱ヨリ桑港マテ十八日以内復航 桑港ヨリ横濱マテ二十日以内

香港レヤトル線 往航横濱ヨリ「レヤトル」マテ十五日以内復航「レヤトル」ヨリ横濱マテ十七日以内

一 船舶資格

本命令書実施ノ日ニ於ケル船舶四年未満ニシテ造船現程ニ合格シ且當該会社ノ所属ニシテ逓信大臣ノ認可ヲ受ケタルモノ

一 船舶ノ検査

隨時検査官吏ヲシテ検査セシメ其成績ニ依リ修繕ヲ命シ若クハ認可ヲ取消スコト此場合ニハ同資格ヲ有スル相當代船ヲ使用セシムルコト

一 航海日時表

命令書ノ業務實施一ヶ月前ニ各港間ノ發着日時表ヲ調製セシムルコト

一 運賃表

旅客貨物ノ運賃表ヲ調製セシメ逓信大臣ハ必要ノ場合ニ際シ時限並ニ品名ヲ指定シテ運賃額ヲ逓減セシムルコト

一 發着証明

各港間ノ發着ハ郵便局帝國領事館又ハ外國官廳ニ於テ証明ヲ受ケシムルコト

一 航海日誌

逓信大臣ノ認可ヲ受ケタル船舶航海日誌ヲ備ヘシムルコト

一郵便物航送  
一郵便物航送

郵便物ハ無償ニテ送送セラルコト  
逓信大臣ハ必要ニ際シ郵便吏員ヲ乗船セ

一郵便物積置

船内ニ盜難火災等ノ虞ナキ堅固ノ郵便物  
貯藏室ヲ設ルコト  
郵便物ノ積置並ニ郵便物船積陸揚ノ費用  
ハ倉社ノ負担トスルコト

一郵便物運送費

郵便物ノ運送中又ハ船積陸揚ノ際之ヲ終  
失毀損セシメタルトキハ倉社ノ責任トスルコト

一郵便物ノ損害

各線路必要ノ場所ニハ郵便用ノ端艇ヲ備

一遭 難

航海中船舶遭難ノ場合ハ倉社ノ費用ヲ  
以テ郵便物ノ運送ヲ計ラシムルコト

一郵便物運送上制裁

倉社ニ於テ郵便物運送ノ命令ニ違背シ逓  
信大臣他ノ船舶ヲ以テ之カ運送ヲ為シタ  
ルトキハ其費用ハ倉社ノ負担トスルコト

一支店代理店

各港ニ支店又ハ代理店ヲ設ケシムルコト  
各船舶及各支店ノ事務負ハ逓信大臣ノ認

一醫 負

各船舶ニハ醫負一名以上ヲ乗組シムルコト

# 正

## 一 船舶ノ使用

逕信大臣ハ必要ニ際シ相當ノ使用料ヲ補償  
 シテ承命書ニ規之ル船舶ヲ使用シ且非常ニ際シハ帝  
 國海軍附屬トナスコトアルハ將又必要場合ニハ實費ヲ支  
 シテ如办ノ構造ヲ變更セシムルコトアルハキコト

ニ於テ現行航海要所法ノ規定ニ依リ右船  
 船ノ常然受クヘキ金額ヲ十年迄通シテ  
 支給スルコト

## 一 支給ノ時期

各船一航海ヲ終リタル毎ニ該船ニ相當ス  
 ル一航海分ノ金額ヲ支給スルコト

## 一 補助金減額

命令書ニ規定シタル各地ニ航行セス依テ  
 航海里數ヲ減縮シタルトキハ其里數ニ應  
 ジ補助金ヲ減スルコト

## 一 代船ナル補助金

各船舶ノ修繕又ハ遭難ノ為メ代船ヲ使用  
 スルトキハ最前認可ヲ受ケタル船舶ノ受  
 クヘキ金額以内ニ於テ相當ノ金額ヲ支給  
 スルコト若シ航海要所法ノ規定ニ合格セザ  
 ル代船ナルトキハ之ヲ支給セザルコト

一 航海修葺費

各船舶ニハ逓信大臣ノ命令ニ從ヒ航海修葺費五石以内ヲ彙組シムルコト

一 船舶ノ使用

逓信大臣ハ必要ニ際シ相當ノ使用料ヲ補償シテ本命令書ニ規定スル船舶ヲ使用スルコト但必要ノ場合ニハ實費ヲ支給シテ船内ノ構造ヲ変更セシムルコト

一 申告簿

各船舶ハ逓信大臣ノ検閲ヲ經タル申告簿ヲ備ヘシメ旅客ノ情ホニ應シ之ヲ提出セシムルコト

一 實況視察

逓信大臣ハ隨時尙書官吏ヲ派遣シテ各線路ニ於ケル業務ヲ視察セシムルコト

一 補助金

補助金ハ命令書有効期限内申付開始ノ時

ニ於テ現行航海要領法ノ規定ニ依リ各船舶ノ當然受クヘキ金額ヲ十年迄通シテ支給スルコト

一 支給ノ時期

各船舶航海ヲ終リタル毎ニ該船ニ相當スル一航海分ノ金額ヲ支給スルコト

一 補助金減額

命令書ニ規定シタル各地ニ航行セズ依テ航海里數ヲ減縮シタルトキハ其里數ニ應ジ補助金を減スルコト

一 代船ナル補助金

各船舶ノ修繕又ハ遭難ノ爲メ代船ヲ使用スルトキハ最前認可ヲ受ケタル船舶ノ受クヘキ金額以内ニ於テ相當ノ金額ヲ支給スルコト若シ航海要領法ノ規定ニ合格セザル代船ナルトキハ之ヲ支給セザルコト

一 寄港地ノ変更

逓信大臣ハ必要ニ際シ命令書ニ定ムル補助金以内ヲ以テ寄港地ノ変更ヲ命スルコト又倉庫・船ヲ必要トスルトキハ同大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ変更シ得ヘキコト  
各線路毎ニ収支ノ計算書ヲ一ヶ年二回提出セシムルコト

一 事業報告

一 義務ノ移轉

逓信大臣ノ認可ヲ受クルニアラサレハ命令書ノ義務ヲ他人ニ移轉シ又ハ船舶ノ賣讓等ヲ為スコトヲ得サルコト

一 違約金

航海年度數ヲ欲サルトキ相當船舶ヲ使用セザルトキ命令期限内ニ船舶ノ修繕又ハ補充ヲ為サザルトキ故ナク航海時間ヲ違反レタルトキ起巨終巨ノ兩港ニ於ケル港

一 割 裁

着日時ヲ変更シタルトキ郵便物揚卸ノ命令ニ違背シ又ハ寄港地ヲ省キタルトキ及其他ノ規定ニ背キタルトキハ一日又ハ十二時間未満毎ニ可為ノ輕重ニ依リ百円以上五千円以下ノ割合ヲ以テ違約金ヲ徴收スヘキコト

一 保証金

義務ヲ他人ニ移轉シ若クハ船舶ヲ賣讓シ又ハ一年三回以上航海ヲ停止シタルトキハ本命令ヲ解除シ航海補助金ノ交付ヲ停止シ當該年度内已ニ執行シタル航海ニ対スル補助金全額ヲ還納セシメ且保証金ヲ没収スルコト  
各線路補助金年額ノ約一割ヲ差出サシム



以上

ルコト

航海奨励法中改正法律集

明治二十九年法律第五十五号 航海奨励法中左ノ通改正ス

第五條 第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

明治三十二年十月一日以後帝國船籍ニ登録スル外

國製造ノ船舶ニハ前二項ノ規定ニ依リ支給スルキ

航海奨励金ノ手廻ヲ支給ス

第十九條中「十月一日ヨリ」下ニ「十八箇年間之ヲ」

七字ヲ加フ

航海奨励法中改正法律案理由書

航海奨励法實施後日尚ホ淺シト云氏其ノ效果ノ見ルハ  
キモノ少レトセス然シトモ我國今日ノ状況ヲ以テ之ヲ  
按スルニ其ノ立法ノ精神ヲ害セサルノ限ニ於テ國家經  
済上ノ権衡ヲ酌量スルノ必要アルヲ認ム本案改正ノ要  
旨ハ此ノ目的ヲ達スルカ爲メニシテ即チ外國製造船舶  
ノ保護ヲ制限シ保セテ本法實施ノ期限ヲ十八箇年間ト  
定メタリ而シテ外國製造船舶ノ保護ニ對スル制限ヲ三  
十二年十月以後入籍ノ船舶ニ限リタルハ現在ノ船舶及  
現ニ計畫中ノ船舶ニ對シ其ノ期限シタル利益ヲ害セサ  
ルノ意ニ外ナラス

内閣批第九號

明治三十年二月廿四日管第一四七號

歐洲並、米國定期航海補助ノ件請議ノ通

但契約訂結ノ件ハ大藏大臣ト協議ニ速ニ議會ニ提出相成ヘク又其ノ使用スル船舶ハ造船規程ニ后括シタルモノニ限リ其ノ他十分ナル條件ヲ命令書ニ掲ケラルルヘシ

甲種法律案ハ乙種ニ関スル契約訂結ノ件ト同時ニ議會ニ提出スル儀ト心得ラレハシ

明治三十年三月十五日

内閣總理大臣 伯爵松方正義



航海獎勵法改正及定期航  
路開始之件

航海獎勵法案別紙甲号ノ通本期  
奉國議會、提出アランコトヲ要ス  
案明治三十一年四月以迄歐洲並東  
國、定期航海ヲ開カンカ爲メ別紙  
乙号ノ金額ヲ目途トシテ補助費ニ  
關シ豫算外國債ノ負担トナルキ  
款約ヲ爲スノ要求書ヲ本期帝國  
議會ニ提出セシコトヲ望ム

通信大臣

内閣総理大臣宛

航海奨励法

第一條 帝國臣民又ハ帝國臣民ノミテ社員若ハ株主  
 トスル商會社ニシテ自己ノ所有ニ專屬シ帝國船  
 籍ニ登録シタル船舶ヲ以テ帝國ト外國トノ間ニ航  
 行貨物旅客ノ運搬ヲ營業トスル者ハ此ノ法律ノ  
 規程ニ依リ其ノ船舶ニ對シ航海奨励金ヲ下付ス  
 第二條 此ノ法律ニ依リ航海奨励金ヲ受クハ船舶  
 ハ總噸數一千噸以上ニシテ一時十海里以上ノ最  
 速速力ヲ有シ通信大臣ノ定ムル造船規程ニ合括シ  
 タル鉄製又ハ鋼製汽船ニ限ル  
 第三條 航海奨励金ヲ受ケムトスル船舶ノ所有者ハ  
 其ノ船舶ニ對シ豫メ通信大臣ノ認許ヲ受ケハシ  
 第四條 左ノ船舶ハ航海奨励金ヲ受クルコトヲ得ス

第一 此、法律施行、日ヨリ二箇年以後、帝國船籍、登録スル外國製造ノ船舶

第二 明治二十九年十月一日以後帝國船籍ニ登録、降製造後五箇年ヲ經過シタル外國製造ノ船舶

第三 製造後十五箇年ヲ經過シタル船舶

第四 帝國政府ノ命令ニ依リル航路ニ使用スル船舶

第五條 航海獎勵金一総噸數一千噸コシテ一時間十海里ノ最速速力ヲ有スル船舶ニ對シテ最速速力一噸航海里數一千海里ニ付前掲五錢ヲ支給シ最速速力一

時間一海里ノ端ニ毎、其ノ百分ノ二十ヲ増給ス但シ最速速力一時間十八海里以上ノ船舶ニ對シテハ

最速速力一時間十七海里ノ船舶ニ對スル割合ニ依リ支給ス

航海獎勵金ハ製造後五箇年ヲ經過セザル船舶ニ對シテハ全額ヲ支給シ五箇年ヲ經過シタル船舶ニ對シテハ一年毎、其ノ百分ノ五ヲ減給ス

航海獎勵金ノ算定スルニハ一噸未滿一海里未滿ノ端數ヲ算入セス

第六條 航海里數ハ貨物旅客、積卸ヲ為シタル各港間、最近航路ニ依リテ算定ス

帝國各港ニ寄港シ外國ニ寄航スル船舶ニ在テハ最近ノ寄港地ヲ起點トシ又外國ヨリ寄航シ帝國各港

ニ寄港スル船舶ニ在テハ最初ノ寄港地ヲ終點トシテ其ノ航海ノ算定ス

航海里数ヲ證明スルニハ寄港地官廳ノ寄港證明ヲ以ラスハシ

第七條 通信大臣ハ命令ヲ發シ相當ノ金額ヲ納付シテ第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ヲ公用ノ為ニ使用スルコトヲ得

船舶所有者前項ノ納付金額ニ對シ不服アルトキハ其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三箇月以内ニ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ出訴ハ使用ヲ停止セズ

第八條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ通信大臣ノ命令ニ依リ左ノ割金以内ニ於テ其ノ費用ヲ以テ航海修業並ニ該船舶ニ乗組ケシメ同大臣ノ定ムル手當ヲ支拂フハシ

総噸数 一千噸以上二千五百噸未満 二人

総噸数 二千五百噸以上四千噸未満 三人

総噸数 四千噸以上 四人

第九條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ通信大臣ノ許可ヲ受ケタルニ非シハ外國人ノ其ノ本支店ノ事務員若ハ該船舶ノ職員ト為スコトヲ得ズ但シ外國ニ於テ死亡其ノ他止ムヲ得サル事故ニ因リ船舶職員ニ致命ヲ生シタルトキハ該地官廳ノ公認ヲ經テ之ヲ補フコトヲ得此ノ場合ニ於テハ該船舶ノ所有者又ハ船長ヨリ直ニ通信大臣ノ許可ヲ請フハシ

第十條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者航海獎勵金ヲ受ケ航海スル場合ニ於テハ通信大臣ノ命

令、從之該船舶之郵便夫員ヲ與貨乘船セシメ及該  
船舶ヲ以テ郵便物、小包郵便物郵便用品及小包郵便  
用品ヲ運送スルニ通送スル

第十一條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者及  
其ノ承継人ハ航海獎勵金ヲ受ケ航海スル期間並其  
ノ航海ヲ終リタル日ヨリ三箇年間其ノ船舶ヲ外國  
人ニ賣渡、貸渡、交換、贈與、質入スルコトヲ得ス但  
シ其ノ船舶ノ既ニ受ケタル航海獎勵金ヲ償還シタ  
ルトキ又ハ火災其ノ他抗拒スルカラザル強制ニ因  
リ航行ニ堪ヘサルトキ若ハ通信大臣ノ許可ヲ得タ  
ルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十二條 通信大臣ハ此ノ法律ニ依リ船舶所有者ノ  
義務ニ屬スル事項、付テハ直ニ其ノ代人若ハ船長

ニ命令シ下スニ得

第十三條 詐偽ノ罪ヲ以テ航海獎勵金ヲ受ケタル  
者又ハ第十一條ノ規程ニ違背シタル者ハ一年以上  
五年以下ノ重禁錮ニ處シ二百円以上十円以下ノ罰  
金ヲ附加ス

前項ノ罪ヲ犯サムトシテ未ダ遂ケザル者ハ刑法未  
遂犯罪ノ例ニ依リ處断ス

第十四條 此ノ法律ニ依リ通信大臣ノ命スル命令又  
ハ第九條ノ規程ニ違背シタル者ハ二十円以上五百  
円以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 此ノ法律ヲ犯シタル者ハ刑法教罪保条  
ノ例ノ用ヲス

第十六條 詐偽ノ罪ヲ以テ航海獎勵金ヲ受ケタル



者ハ其ノ因テ得タル金額ヲ償還セシメ第十一條ノ  
規程ニ違背シタル者ハ其ノ既ニ受ケタル航海獎勵  
金ヲ償還セシム

第十七條 船舶所有者此ノ法律ヲ犯シタルトキハ連  
信大臣ハ航海獎勵金ノ下付ヲ停止スルコトヲ得第  
十二條ノ場合ニ於テ其ノ代人又ハ船長ノ犯シタル  
トキ亦同シ

第十八條 前數條ノ罰則ハ商事會社ニ在テハ其ノ各  
條ニ掲グルル所為ヲ為シタル業務擔當ノ任アリ社員  
若ハ取締役ニ之ヲ適用ス

第十九條 航海獎勵金ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ滿十  
英箇年間之ヲ支給ス

附則

五ノ前ハ  
左ノ條ニ由  
テ之ヲ廢止ス  
七ノ條ニ由  
テ之ヲ廢止ス

第二十條 此ノ法律ハ明治三十年四月一日ヨリ施行  
ス

第二十一條 明治二十九年法律第十五號航海獎勵法  
ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第二十二條 此ノ法律施行以前帝國船籍ニ登録シタ  
ル船舶及此ノ法律施行以後一箇月内ニ通信大臣ハ

製造ノ届出ヲ為シ明治三十一年三月三十一日迄ハ  
帝國船籍ニ登録スル船舶ニハ噸數五百噸ヲ増ス  
毎、第五條ノ航海獎勵金定率ノ百分ノ十ヲ増ス

四月三十日トテ  
六月三十日ト改メ  
左ノ條ニ依リ内田

理由書

現行航海獎勵法ノ規定ニ據シハ航海獎勵金ヲ受クハ  
 船舶ノ製造ハ帝國ニ於テスルト外國ニ於テスルト  
 間ハ又其ノ航路ハ唐ノ外國諸港ノ間ニ亘リ得又  
 航海獎勵金ノ下付ハ永遠ニ及フモノトス之ヲ要スル  
 二該法ハ規模廣大ニシテ異日國家經濟上權衡ヲ失ス  
 ルノ虞トキテ保セズ依テ之ヲ未然ニ防キ帝國航業ヲ  
 レテ完全ノ飛達ヲ成サシメト期ス是本業ヲ提  
 出スル所以ナリ現行法ニ依リ既ニ船舶ノ新造若ハ航  
 路ノ開始ヲ計畫スル者ニ對シテ其ノ企望ヲ遂行セ  
 レムルノ用意ナカハカラス故ニ本業ニ於テ之ニ假  
 スニ相當ノ猶豫期間ヲ以テセシトス  
 帝國ト歐洲トノ間及帝國ト米國トノ間ハ帝國政府

ノ命乞リ以テ定期航路ヲ開始スルノ必要アリシ認ム  
 依テ本案ノ施行ト共ニ之ニ對スル經費豫算ヲ提出シ  
 帝國議會ノ協賛ヲ求メシコトヲ期ス

乙類

一貳百九拾壹萬九千九百七拾五圓貳拾八錢 改米三航路補助費年額

内譯

一貳百貳拾九萬四千九百五拾七圓叁拾四錢 改州線補助

一六拾貳萬四千拾七圓九拾四錢 米國線補助

右ハ航路獎勵法ニヨリ當然受有ス、ナシ額、ヨリ  
 算定セリ

説明

改州線定期航路要領

一發着港及寄港地 往航ハ横濱、神戶、門司、香港、新嘉  
 坡、コロンボ、ホートセツト、馬耳塞、倫敦、セントポール、  
 著 復航ハセントポール、ホートセツト、コロンボ、  
 新嘉坡、香港、神戶、横濱著

一 今年航海度數 二六回  
 一 往復航海距離數 二三、四八六海里  
 一 今年延長航海距離數 六一〇、六三六海里  
 一 使用船數 一二艘  
 一 平均一艘、総噸數 五、八〇〇噸  
 一 同 查簿噸數 三六、〇〇噸  
 一 同 連力 一四海里  
 一 同 船價 八一、二〇〇円  
 一 本航海、對スル收支、概算ヲ揚メ、左ノ如シ  
 一 今年收入總額 二、四三三、〇三八円  
 一 今年支出總額 四、七二六、九九五円  
 收支差列不足 二、二九四、九五七円  
 三、四〇  
 米國繞道期航海要領

一 發着港及寄港地 往航ハ香港、門司、神戶、橫濱、布哇、レ  
 一 同 復航ハレ、レ、ト、ル、發着港、神戶、香港、着  
 一 今年航海度數 一二回  
 一 往復航海距離數 一三、六八〇海里  
 一 今年延長航海距離數 一六四、一六〇海里  
 一 使用船數 三艘  
 一 平均一艘、総噸數 五、六三〇噸  
 一 同 查簿噸數 三一、〇〇噸  
 一 同 連力 一五海里  
 一 同 船價 一、〇二六、〇〇円  
 一 本航海、對スル收支、概算ヲ揚メ、左ノ如シ  
 一 今年收入總額 二、〇四、五二二円  
 一 今年支出總額 一、二二八、五四〇円

收支差引不足 六二四、〇一七、四九四、〇

憲法第六十二條第二項ニ據リ豫算外國庫ノ

頁權トナルハ、契約ヲ為スノ要求

一 歐洲線及米國線ハ帝國ノ交通上極要ノ航路ニシテ  
定期航海ヲ開始スルハ實ニ緊急ノ事業トス仍テ明  
治三十一年度ヨリ至四十年度ニ至ル十箇年度間航  
路擴張費トシテ左ニ掲グル金額以内ヲ下付スルノ  
契約ヲ三十年度ニ於テ締結スルヲ要ス但本契約ハ  
明治三十三年度下半年期ニ於テ既經ノ成績ニ依リ該  
金額ヲ改正スルノ條件ヲ設クヘシ

歳出臨時部

第一款

補助費

第三項

航路擴張費

科	目	五十一年度、四十年度、毎年下付之金額
歐洲線航海補助		二、二九四、九五七、三四〇
英國線航海補助		六、二四〇、一七九、四〇〇
合計		二、九一八、九七五、二八〇

秘發第三一九九號

明治三十四年十月十四日達濟

航海獎勵法改正ノ件  
 航海獎勵法改正案別紙ノ通本  
 期滿帝國議會、提出アラシコトヲ  
 右閣議ヲ請フ

逓信大臣

内閣総理大臣

航海獎勵法改正案

第一條 帝國臣民又ハ帝國臣民ノミテ社貨若ハ株主

トスル商事會社ニシテ自己ノ所有、專屬シ帝國船

籍、登録シタル船舶ヲ以テ帝國ト外國トノ間ニ航

ヲ貨物旅客ノ運搬ヲ營業トスル者ニハ此ノ法律ノ

規程ニ依リ其ノ船舶、對シ航海獎勵金ヲ下付ス

第二條 此ノ法律ニ依リ航海獎勵金ヲ受ク一ノ船舶

ハ総噸數一千噸以上ニシテ一時間十海里以上ノ最

速速力ヲ有シ通信大臣ノ定ムル造船規程ニ合括シ

タル鉄製又ハ鋼製汽船ニ限ル

第三條 航海獎勵金ヲ受ケムトスル船舶ノ所有者ハ

其ノ船舶ニ對シ豫メ通信大臣ノ認許ヲ受ケ、レ

第四條 左ノ船舶ハ航海獎勵金ヲ受クルコトヲ得ス

第一 此、法律施行、日ヨリ二箇年以後、帝國船籍ニ登録スル外國製造ノ船舶

第二 明治二十九年十月一日以後帝國船籍ニ登録ノ船舶製造後五箇年ヲ経過シタル外國製造ノ船舶

第三 製造後十五箇年ヲ経過シタル船舶

第四 帝國政府ノ命令ニ依リテ航路ニ使用スル船舶

第五條 航海獎勵金ハ總噸數一千噸、シテ一時間十海里ノ最強速力ヲ有スル船舶ニ對シ總噸數一噸航海里數一千海里ニ付二十錢ヲ支給シ最強速力一時間一海里ヲ増ス毎、其ノ百分ノ二十ヲ増給ス但シ最強速力一時間十八海里以上ノ船舶ニ對シテハ最

強速力一時間十七海里ノ船舶ニ對スル割合ニ依リ支給ス

航海獎勵金ハ製造後五箇年ヲ経過セザル船舶ニ對シテハ全額ヲ支給シ五箇年ヲ経過シタル船舶ニ對シテハ一年毎、其ノ百分ノ五ヲ減減ス

第六條 航海里數ハ貨物旅客ノ積卸ヲ為シタル各港間ノ最近航路ニ依リテ之ヲ算定ス

帝國各港ニ寄港シ外國ニ發航スル船舶ニ在リテ最近ノ寄港地ヲ起點トシ又外國ヨリ發航シ帝國各港ニ寄港スル船舶ニ在リテ最近ノ寄港地ヲ起點トシ其ノ航海里數ヲ算定ス



航海員數ヲ證明スルハ、寄港地官廳ノ寄港證明ヲ以テスルシ

第七條 通信大臣ハ命令ヲ發シ相當ノ金額ヲ納付シ  
テ第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ヲ公用ト爲シ、使用  
スルコトヲ得

船舶所有者前項ノ納付金額ニ對シ不服アルトヤハ  
其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三箇月以内ニ裁判所ニ  
出訴スルコトヲ得

前項ノ出訴ニ使用ヲ停止セズ

第八條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ通  
信大臣ノ命令ニ依リ左ノ割合以内ニ於テ其ノ費用  
ヲ以テ航海修業生ヲ該船舶ニ乗組マシメ同大臣ノ  
定ムル手當ヲ支給スルシ

總噸數一噸以上二千五百噸未満 二人

總噸數二千五百噸以上四千噸未満 三人

總噸數四千噸以上 四人

第九條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ通  
信大臣ノ許可ヲ受ケルニ非シハ外國人ヲ其ノ本支  
店ノ事務員若シテ該船舶ノ職員ト爲スコトヲ得ス  
但シ外國ニ於テ死亡甚シク他止ムヲ得サル事故ニ因  
リ船舶職員ニ缺員ヲ生シタルトキハ該地官廳ノ公  
認ヲ經テ之ヲ補フコトヲ得此ノ場合ニ於テ該船  
舶ノ所有者又ハ船長ヨリ直ニ通信大臣ノ許可ヲ請  
フべシ

第十條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者航海  
獎勵金ヲ受ケ航海スル場合ニ於テハ通信大臣ノ命

令之從之該船舶之郵便吏員ヲ無賃乗船セシメ及該船舶ヲ以テ郵便物小包郵便物郵便用品及小包郵便用品ヲ無料ニテ運送スルコト

第十一條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者及  
其ノ承継人ハ航海獎勵金ヲ受ケ航海スル期間並其  
ノ航海ヲ終リタル日ヨリ三箇年向其ノ船舶ヲ外國  
人ニ賣渡貸渡交換贈與質入書入スルコトヲ得ス但  
シ其ノ船舶ノ既ニ受ケタル航海獎勵金ノ積還シタ  
ルコト又ハ其ノ他抗拒スルコトヲ得ル理則ノ因  
リ航行ノ場ニ於テ若シ通信大臣ノ許可ヲ得タ  
ルコトハ此ノ限ニ在ラス

第十二條 通信大臣ハ此ノ法律ニ依リ船舶所有者ノ  
義務ニ屬スル事項ニ對テハ直ニ其ノ代人若ハ船長

ノ命令ヲ下スニトシ得

第十三條 詐偽ノ所為ヲ以テ航海獎勵金ヲ受ケタル  
者又ハ第十一條ノ規程ニ違背シタル者ハ一年以上  
五年以下ノ重禁錮ニ處シ二百圓以上千圓以下ノ罰  
金ヲ附加ス

前項ノ罪ヲ犯シタル者ハ其ノ刑格ニ  
違犯罪ノ例ニ依リ處断ス

第十四條 此ノ法律ニ依リ通信大臣ノ奉スル命令又  
ハ第九條ノ規程ニ違背シタル者ハ二十四以上五百  
圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 此ノ法律ヲ犯スル者ハ刑法數罪併科  
ノ例ヲ用ザル

第十六條 詐偽ノ所為ヲ以テ航海獎勵金ヲ受ケタル

者ハ其ノ因ヲ得タル金額ヲ償還セシメ第十一條ノ  
規程ニ違背シタル者ハ其ノ既ニ受ケタル航海獎勵  
金ヲ償還セシム

第十七條 船舶所有者此ノ法律ヲ犯シタルトキハ通  
信大臣ハ航海獎勵金ノ下付ヲ停止スルコトヲ得第  
十二條ノ場合ニ於テ其ノ代人又ハ船長ノ犯シタル  
トキ亦同シ

第十八條 前條條ノ罰則ハ商會社ニ在ラハ其ノ各  
條ニ掲タル所為ヲ爲シタル業務擔當ノ任ヤル社員  
若ハ取締役ニ之ヲ適用ス

第十九條 航海獎勵金ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ第十  
五箇年向テ支給ス

附則

第二十條 此ノ法律ハ明治三十一年四月一日ヨリ施  
行ス

第二十一條 明治二十九年法律第十五號航海獎勵法  
ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第二十二條 此ノ法律施行以テ帝國船籍ノ登録シタ  
ル船舶及此ノ法律施行以後一箇月内ニ通信大臣ニ  
製造ノ届出ヲ爲シ明治三十三年三月三十一日迄ハ  
帝國船籍ニ登録スル船舶ニハ總噸數一千噸ニシテ  
一時間十海里ノ最速速力ヲ有スルモノニ對シ總噸  
數一噸航海里數一千海里ニ付二十五錢ヲ支給シ總  
噸數五百噸ヲ増ス毎ノ其ノ百分ノ十最速速力一時  
間増ス毎ノ其ノ百分ノ二十ヲ増給ス但シ總噸數  
六百五十噸以上又ハ最速速力一時間十八海里以上

ノ船舶ニ對シテハ總噸數六千噸又ハ最強速ノ一時  
向十七海里ノ船舶ニ對スル高合ニ依リ支給ス

理由書

現行航海獎勵法ノ規定ニ據レハ航海獎勵金ヲ受クハ  
キ船舶ノ製造ハ帝國ニ於テスルト外國ニ於テスルト  
ノ間ハ又其ノ航路ハ廣ク外國諸港ノ間ニ亘リ將又  
航海獎勵金ノ下付ハ永遠ニ及フモノトス之ヲ要スル  
ニ該法ハ規模廣大ニシテ異日國家經濟上權衡ヲ失ス  
ルノ虞ナキヲ保セス依テ之ヲ未ダ、防、帝國航業ヲ  
シテ完全ノ牽連ヲ成サシメコトフ期ス是本案ヲ提  
出スル所以ナリ現行法ニ依リ既、船舶ノ新造若ハ航  
路ノ開始ヲ計畫スル者ニ對シテハ其、在望ノ邊行セ  
シムルノ用意ナカレハナク、故、本案、於テ之ニ假  
ス、相當ノ猶豫期間ヲ以テセントス

航海奨励法

第一條 帝國臣民又ハ帝國臣民ノミヲ社員差ハ株主  
トスル商事會社ニシテ自己ノ所有ニ專屬シ帝國船  
籍ニ登録シタル船舶ヲ以テ帝國ト外國トノ間又ハ  
外國諸港ノ間、於テ貨物旅客ノ運搬ヲ營業トスル  
者ニハ此ノ法律ノ規程ニ依リ其ノ船舶ニ對シ航海  
奨励金ヲ下付ス

第二條 此ノ法律ニ依リ航海奨励金ヲ受ク、キ船舶  
ハ總毛敷一千噸以上ニシテ一時兩十海里以上ノ最  
強速力ヲ有シ通信大臣ノ定ムル造船規程ニ合致シ  
タル鐵製又ハ鋼製汽船ニ限ル

第三條 航海奨励金ヲ受ケムトスル船舶ノ所有者ハ  
其ノ船舶ニ對シ豫メ通信大臣ノ認許ヲ受ク、ハシ

第四條

左ノ船舶ハ航海獎勵金ヲ受ケルコトヲ得ニ  
此ノ法律施行以後帝國船舶ノ登録ノ際製造

後五箇年ヲ経過シタル外國製造ノ船舶  
明治二十九年十月以後帝國船舶ノ登録ノ際製造後五箇年ヲ経過シタル外國製造ノ船舶

弟三 帝國政府ノ命令ニ依リテ航路ニ使用スル船

第五條

航海獎勵金ハ總噸數一千噸ニシテ一時間十  
海里ノ最速力ヲ有スル船舶ニ對シ總噸數一噸航  
海里數一千海里ニ付二十五錢ヲ支給シ總噸數五百  
噸ヲ増ス毎、其ノ百分ノ十最速力一時間一海里  
ヲ増ス毎、其ノ百分ノ二十ヲ増ス但シ總噸數未  
キ五百噸以上又ハ最速力一時間十八海里以上ノ  
船舶ニ對シハ總噸數六十噸又ハ最速力一時間

十七海里ノ船舶ニ對スル割合ニ依リ支給ス

航海獎勵金ハ製造後五箇年ヲ経過セタル船舶ニ對

シテハ金額ヲ支給シ五箇年ヲ経過シタル船舶ニ對

シテハ一年毎、其ノ百分ノ五ヲ递减ス

航海獎勵金ノ算定スルハ一噸未満一海里未満ノ

端數ヲ算入セズ

第六條

航海里數ハ各港間ノ最近航路ニ依リテ算

定ス

帝國各港ノ寄港シ外國ノ船舶スル船舶ニ在ラハ最

終ノ寄港地ヲ起點トシ又外國ヨリ寄航シ帝國各港

ニ寄港スル船舶ニ在ラハ最初ノ寄港地ヲ起點トシ

テ其ノ航海里數ヲ算定ス

航海里數ノ證明スルハ寄港地官廳ノ寄港證明ヲ

以ラズ一レ

第七條 逓信大臣ハ命令ヲ奉シ相當ノ金額ヲ統籌シ  
テ第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ヲ公用ノ為ニ使用  
スルコトヲ得

船舶所有者前項ノ統籌金額ニ對シ不服アルトキハ  
其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三箇月以内ニ裁判所ニ  
出訴スルコトヲ得

前項ノ出訴ニ使用ヲ停止セズ

第八條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ逓  
信大臣ノ命令ニ依リ左ノ割合以内ニ於テ其ノ費用  
ヲ以テ航海修業生ヲ該船舶ニ乗組マシメ同大臣ノ  
定ムル手當ヲ支給ス一レ

總噸數一十噸以上二十噸未満 二人  
總噸數二十噸以上四十噸未満 三人  
總噸數四十噸以上 四人

第九條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ逓  
信大臣ノ許可ヲ受ケルニ非ズハ外國人ヲ其ノ本支  
店ノ事務員若シ該船舶ノ職員ト爲スコトヲ得ズ但  
シ外國ニ於テ死ニ其ノ他止ムヲ得サシ事故ニ因リ  
船舶職員ニ職員ヲ生シタルニキハ該地官廳ノ公認  
ヲ經テ之ヲ補フコトヲ得此ノ場合ニ於テ該船舶  
ノ所有者又ハ船長ヨリ直ニ逓信大臣ノ許可ヲ請フ  
ヘシ

第十條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者航海  
獎勵金ヲ受ケ航海スル場合ニ於テ逓信大臣ノ命  
令ニ從ヒ該船舶ニ郵便吏員ヲ無償乗船セシメ及該

...

船舶ヲ以テ郵便物ハ其郵便物郵便用品及ハ其郵便用品ヲ無料ニテ運送スル

第十一條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶、所有者及  
其ノ承継人ハ航海獎勵金ノ受ケ航海スル期向並其  
ノ航海ノ既リタル日ヨリ三箇年向其ノ船舶ノ外國

人ニ賣渡貨渡文據贈與賣入書入タルコトヲ得ス但  
シ其ノ船舶ノ既ニ受ケタル航海獎勵金ヲ償還シ

ルトキ又ハ天災等ノ他抗拒スルカラサハ強制ニ因  
リ航行ノ堪ヘザルトキ若ハ通信大臣ノ許可ヲ得テ

第十二條 通信大臣ハ此ノ法律ニ依リ船舶所有者ノ  
義務ノ屬スル事項ニ付テハ直ニ其ノ代人若ハ船長

ノ命令ヲ下スコトヲ得

第十三條 詐偽ノ罪ヲ以テ航海獎勵金ヲ受ケタル  
者又ハ第十一條ノ規程ニ違背シタル者ハ一年以上

五年以下ノ重禁錮ニ處シ二百圓以上千圓以下ノ罰  
金ヲ附加ス

前項ノ罪ヲ犯サルトシテ未ダ遂ケザル者ハ刑法中  
運犯罪ノ例ニ依リ處断ス

第十四條 此ノ法律ニ依リ通信大臣ノ命又  
ハ第九條ノ規程ニ違背シタル者ハ二十圓以上五百

圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 此ノ法律ヲ犯シタル者ハ刑法教罪條  
ノ例ヲ用カス

第十六條 詐偽ノ罪ヲ以テ航海獎勵金ヲ受ケタル  
者ハ其ノ因ヲ得タル金額ヲ償還セシメ第十一條ノ



規程、違背シタル者ハ其ノ既、受ケタル航海獎勵  
金ヲ償還セシム

第十七條 船舶所有者此ノ法律ヲ犯シタルトキハ通  
信大臣ハ航海獎勵金ノ下付ヲ停止スルコトヲ得第  
十二條ノ場合ニ於テ其ノ代人又ハ船長ノ犯シタル  
トキ亦同シ

第十八條 前數條ノ罰則ハ商事會社ニ在ラハ其ノ各  
條ニ掲グルル所為ヲ為シタル董事擔當ノ任アリ社員  
若シ取締役ニ至リ適用ス

第十九條 此ノ法律ハ明治二十九年十月一日ヨリ施  
行ス  
航海獎勵金ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ滿十五箇年間ニテ支給ス

附則

第二十條 此ノ法律ハ明治三十一年四月一日ヨリ施

行ス

第二十一條 明治二十九年法律第十五號航海獎勵法  
ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第二十二條 此ノ法律施行以前帝國船舶、登録シタ  
ル船舶及此ノ法律施行以後一箇月内、通信大臣ニ  
製造ノ届出ヲ為シ明治三十三年三月三十一日迄ハ

帝國船舶、登録スル船舶ニ、總噸數一千噸ニシテ  
一時間十海里ノ最速速力ヲ有スルモノニ對シ總噸  
數一噸海里數一海里、毎二十五錢ヲ支給シ總

噸數五百噸ヲ増ス毎、其ノ百分ノ十最速速力一時  
間一海里ヲ増ス毎、其ノ百分ノ二十ヲ増ス但シ  
總噸數六千五百噸以上又ハ最速速力一時間十八海

里以上ノ船舶ニ對シテハ總噸數七千噸又ハ最速速

力一時間十七海軍ノ船舶ノ對スル制給、依リ支給  
之

帝國議會ニ提出スル保護人病

南洋南洋航路補助費要求額

一、歐洲線航海補助

二、三、四、五、三、四、〇、〇

本目ニ對スル要求額、一箇年ノ航海度敷及收支  
等ノ豫定シ其收支不足額、就テ算定セリ

一、シヤトル線航海補助

三、一、〇、三、四、七、四、〇、〇

本目ニ對スル要求額、一箇年ノ航海度敷及收支  
等ノ豫定シ其收支不足額、就テ算定セリ  
定セ、但シ其年分ノ算出セリ、本年度ノ準備等  
ノ為時日ヲ要ス、以テ其年分ノ航海セシムル見  
込ナルニ據ル

一、臺灣線航海補助

四、三、四、五、一、九、四、〇、〇

本目ニ對スル要求額、一十年ノ航海度敷及收支  
等ノ豫定シ其收支不足額、就テ其年分ノ算

力一時間十七海里ノ船舶一對スル制在、依リ支給  
之

歐米特定期航路補助費要本額

一、歐洲線航海補助

二、三、四、五、三、四、〇、〇

本目ニ對スル要本額、一箇年ノ航海度數及收支  
等ヲ豫定シ其收支不足額、就テ算定セリ  
一、レヤトニ航海補助 三、一、〇、三、四、七、四、〇、〇

本目ニ對スル要本額、一箇年ノ航海度數及收支  
等ヲ豫定シ其收支不足額、就テ算定セリ  
定セ、但半々年分ヲ算出セ、本年度ハ準備等  
ノ為時日ヲ要ス、以テ半々年航海セ、見  
込ナルニ據ル

一、臺灣線航海補助

四、三、四、五、一、九、四、〇、〇

本目ニ對スル要本額、一十年ノ航海度數及收支  
等ヲ豫定シ其收支不足額、就テ算定セ、半々年分ヲ算



航海獎勵法改正法被

法律第

號

明治二十九年法律第十五號航海獎勵法中左ノ通改正  
ス

第一條中外國トノ間ノ下又ハ外國諸港ノ間ノ間、八字ヲ  
削除ス

第四條第三號ノ次、左ノ一號ヲ追加ス

第四 明治三十二年十月一日以後帝國船籍、登  
録スル外國製造ノ船舶

第十九條中「十月一日ヨリ」ノ下「十七箇年間之ヲ」ノ七字  
ヲ追加ス

理由書

航海獎勵法實施後日尚ホ淺シト云々其ノ効果ノ見ル  
ヘキモノ少シトセズ然レトモ我國今日ノ狀況ヲ以テ  
之ヲ棄スルニ其立法ノ精神ヲ害セザルノ限ニ於テ國  
家經濟上ノ權衡ヲ酌量スルノ必要アルヲ認ム本案改  
正ノ要旨ハ此ノ目的ヲ達スルカ爲メニシテ即チ外國  
諸港間ノ航海獎勵ヲ廢止シ外國製造船舶ノ保護ヲ制  
限シ係セラ獎勵金下付ノ期限ヲ實施後十七年向ト定  
メタリ而シテ外國製造船舶ノ保護ヲ直チニ廢止セサ  
ルハ現時計畫中ノ富業者ニ對シテ相當ノ猶豫期間ヲ  
與フルノ意ニ外ナラス

航海獎勵法

第一條

帝國臣民又ハ帝國臣民ノミテ社員若ハ株主

トスル商事會社ニシテ自己ノ所有ニ專屬シ帝國船

籍ニ登録シタル船舶ヲ以テ帝國ト外國トノ間又ハ

外國諸港ノ間、於テ貨物旅客ノ運搬ヲ營業トスル

者ハ、此ノ法律ノ規程ニ依リ、其ノ船舶ニ對シ航海

獎勵金ヲ下付ス

第二條

此ノ法律ニ依リ航海獎勵金ヲ受クハ、船舶

ハ總噸數一千噸以上ニシテ、一時間十海里以上ノ最

強速力ヲ有シ、通信大匠ノ定ムル造船規程ニ合格シ

タル鋼製汽船ニ限ル

第三條

航海獎勵金ヲ受クハ、船舶ノ所有者ハ

其ノ船舶ニ對シ豫メ通信大匠ノ認許ヲ受ク、シ

第四條

左ノ船舶ハ航海獎勵金ヲ受クニコソ得ス

第一 此ノ法律施行以後帝國船籍ニ登録シ陸揚げ

後之箇年ヲ経過シタレバ外國製造ノ船舶

第二 製造後十五箇年ヲ経過シタレバ船舶

第三 帝國政府ノ命令ニ依レバ航路ニ使用スル船舶

第四 明治三十二年十月一日以後帝國船籍ニ登録

第五條

航海獎勵金ハ總噸數一千噸ニシテ一時間十

海里ノ最速速力ヲ有スル船舶ニ對シ總噸數一噸航

海里數一ノ海里ニ片二十五錢ヲ支給シ總噸數五百

噸ヲ増ス毎ノ其ノ百分ノ十最速速力一時間一海里

ヲ増ス毎ノ其ノ百分ノ二十ヲ増シ但シ總噸數六

千五百噸以上又ハ最速速力一時間十八海里以上ノ

船舶ニ對シテハ總噸數六千噸又ハ最速速力一時間

十七海里ノ船舶ニ對スル割合ニ依リ支給ス

航海獎勵金ハ製造後五箇年ヲ経過セザル船舶ニ對

シテハ全額ヲ支給シ五箇年ヲ経過シタル船舶ニ對

シテハ一年毎ノ其ノ百分ノ五ヲ減少ス

航海獎勵金ヲ算定スルニハ一噸ニ滿一海里ニ滿ノ

端數ヲ算入セス

第六條

航海里數ハ各港間ノ最近航路ニ依リテ之ヲ算

定ム

帝國各港ノ寄港シ外國ノ船舶又ハ船舶ニ在リ最

終ノ寄港地ヲ起點トシ又外國ヨリ寄航シ帝國各港

ニ寄港スル船舶ニ在リ最初ノ寄港地ヲ起點トシ



其ノ航海里教ヲ美定ス  
航海里教ヲ証明スルハ其港地官廳ノ号院証明ヲ  
以テスル

第七條 逋債大臣ハ命令ヲ發シ相當ノ金額ヲ定メ  
第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ヲ公用ノ爲メ使用  
スルコトヲ得

船舶所有者前項ノ定額金額ニ對シ不服アリタルハ  
其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三箇月以内ニ裁判所ニ  
出訴スルコトヲ得

前項ノ出訴ハ使用ヲ停止セズ

第八條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ逋  
債大臣ノ命令ニ依リ左ノ割合以内ニ之ヲ其ノ費用  
ヲ以テ航海修繕費ニシテ該船舶ノ乗組員ニシテ同大臣ノ

定ムル年當リ支給スル

総噸數一千噸以上ニ至ル噸數

二人

総噸數二百五十噸以上四百噸未満

三人

総噸數四百噸以上

四人

第九條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者ハ逋  
債大臣ノ許可ヲ受ケタル船舶ノ非シハ外國人ノ其ノ本  
支店ノ事務員若ハ該船舶ノ職員ト爲スコトヲ得  
但シ外國ニ於テ死亡其ノ他止ムヲ得ナシ其改ニ因  
リ船舶職員ノ數員ヲ減シタルトキハ該地官廳ノ公  
認ヲ經テ之ヲ補フコトヲ得此ノ場合ニ於テハ該船  
舶ノ所有者又ハ船長ヨリ直ニ逋債大臣ノ許可ヲ請  
フべシ

第十條 第三條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者航海

獎勵金ヲ受ケ航海スル場合、航フニ通信大臣ノ命  
令ニ従ヒ該船舶ニ郵便受負ヲ無償乗船セシメ及該  
船舶ヲ以テ郵便物ニ包郵便物郵便用品及小包郵便  
用品ヲ無料ニ運送スルシ

第十一條 第二條ノ認許ヲ受ケタル船舶ノ所有者及  
号ノ承継人ハ航海獎勵金ヲ受ケ航海スル期間並其  
ノ航海ヲ終リタル日ヨリ三箇年向其ノ船舶ヲ外國  
人ニ賣渡貨渡交換贈與賣入書入スルコトヲ得ズ但  
シ其ノ船舶ノ既ニ受ケタル航海獎勵金ヲ償還シタ  
ルトキ又ハ天災其ノ他抗拒ニ一カラスナル理由ニ因  
リ航行ニ堪ヘザルトキ若シ通信大臣ノ許可ヲ得タ  
ルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十二條 通信大臣ハ此ノ法律ニ依リ船舶所有者ノ

義務ノ屬スル事項ニ付テハ直ニ其ノ代人若シ船長  
ニ命令ヲ下スコトヲ得

第十三條 詐偽ノ罪ヲ以テ航海獎勵金ヲ受ケタル  
者又ハ第十一條ノ規程ニ違背シタル者ハ一年以上  
五年以下ノ重禁錮ニ處シ二百円以上千円以下ノ罰  
金ヲ附加ス

前項ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケザル者ハ刑法ニ  
遵犯罪ノ例ニ依リ處断ス

第十四條 此ノ法律ニ依リ通信大臣ノ命又  
ハ第九條ノ規程ニ違背シタル者ハ二十円以上五百  
円以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 此ノ法律ヲ犯シタル者ハ刑法教罪偽造  
ノ例ヲ用ザル

第十六條 詐偽、罪為、以テ航海獎勵金ノ受ケタル者、其因テ得タル金額ヲ償還セシメ、第十一條ノ規程ニ違背シタル者、其ノ既、受ケタル航海獎勵金ヲ償還セシム

第十七條 船舶所有者此ノ法律ヲ犯シタル者ハ、海務大臣ハ航海獎勵金ノ下付ヲ停止スルコトヲ得、若シテ再犯シタル者ハ、船長ノ犯シタル者トモ同シ

第十八條 前條條ノ罰則ハ、商會社、在ラハ其ノ各條、揭、ル可為ヲ為シタル業務担当、任、丁、ル社員若ハ取締役、之ヲ適用ス

第十九條 此ノ法律ハ明治二十九年十月一日ヨリ施行ス

十七箇年向之ノ

當會社營ム所ノ回漕業タル元來世界全通ヲ目的トスルモノニシテ其向テ國威之ニ伴ヒ國利之ニ隨フ是ヲ以テ其執ル所ノ方針ハ内航ヲ整理シ進セラ其航權ヲ世界ノ全面ニ及ホシ以テ海國ノ航業ヲ完備スルニ在リ即チ當會社ハ創立ノ際專ラ意ヲ内地沼澤ニ注キ漸ク基礎ノ成ルニ從ヒ力ヲ外ニ致シ二十二年上海浦潮斯德ヲ開始シ二十八年之ヲ香港ニ延長シ二十六年十一月孟買線ヲ開ケリ此線路ハ一時諸強國ノ同盟諸會社ヨリ激烈ナル反對ヲ受ケ幾コト其維持ニ苦ミタルニ幸ニ本年十月一日ヨリ明治三十四年三月三十一日ニ至ル四十年六個月間郵便物運送及旅客貨物運搬ノ為メ毎年航海運數ニ應シテ助成金ヲ下附セラレ

コト、ナリ此航路、維持ヲ謀ルコトヲ得タリ又濠洲  
航路ハ本年六月株主臨時總會ノ決議ニ基キ開航ノ計  
画ヲ為セシ際右益買線同様本年十月ヨリ向フ四ヶ年  
六ヶ月間助成航路トナリ速ニ之ヲ開始スルニ至リ  
蓋シ航海奨励法ノ設アルニ拘ハラズ左ニ航路ヲ特定  
航路ト定メラレタリ目今ノ國勢ニ應シ政府ニ於テ  
其必要ヲ認メラレタリモト信ス又當會社ハ戰後帝  
國ノ進運ニ應スルカ為メ歐洲米國ノ二大航路ヲ開設  
スルノ緊要ナルヲ認メ且ツ時機ノ失フヘカラサレ  
ノアルヲ以テ國家ノ後援ヲ後日ニ期シ既ニ本年五月  
歐洲航路ヲ開キ又本年八月末開航ノ期ニ至リ然  
ルニ此二大航路開始以來ノ実績ニ徴スレハ毎航鐘万  
ノ損失ヲ免レシメ而シテ航海奨励法ニ賴シハ幾分カ此

損失ヲ償ヒ得ルカ如シト雖凡同法ノ制タル船舶五ヶ  
年後ハ船齡ニ從テ年々奨励金ヲ遞減セラル、モノ  
シテ到底此航路ヲ永遠ニ持續スル能ハサル、モナ  
ス奨励金ヲ受ケントスルニ實際、於テ極小年航鐘額  
ノ損失アリ一會社ノ獨力ヲ以テ之ニ當ラント欲セ  
勢ヒ中途ニシテ棄絶スルノ止ムヲ得サルニ至ラシ抑  
此二大航路ハ東西兩球ヲ聯絡スル一大貫線、シテ帝  
國戰後ノ經管ヲ全クシ歐米先進國ニ對シ帝國ノ位地  
ヲ進メ貿易ヲ振張シ和親ヲ厚フスルニハ此大貫線ニ  
於テ帝國ノ航權ヲ占ムルヨリ急且ツ先ナルハナシ是  
ヲ以テ苟モ此二大航路ヲ永遠ニ持續シ既ニ開始シタ  
ル航權ヲ失ハサレト欲セハ即今此二大航路ヲ國家  
ノ特定航路ト為シカク凡十ヶ年以上ノ期限ヲ定メ其

損失ヲ補足スルニ在リ實ニ此ニ大航路ノ興廢ハ全ク  
 特定航路ト為スト否トニ由ルモトス  
 前陳ノ理由ニ依リ當會社ハ帝國海運業ノ前途ヲ慮リ  
 國利國權ノ在リ所ヲ重シク能クマラ右ニ大航路ヲ永  
 遠ニ持續セシコトヲ欲シ即チ特定航路トシテ國家ヨ  
 リ助成ヲ仰クノ止ムヘカラサレト迫リ茲ニ改洲航路  
 ニ對シ毎年全費百六拾萬圓八千四百圓末國航路ニ  
 對シ毎年全七拾七萬圓千貳百八拾八圓總計全費百六  
 拾九萬九千參百參拾六圓ノ損失額ニ向テ拾五萬圓  
 助成セラレシコトヲ懇願仕候甚ニ航路ニ用ニル船舶  
 ノ種類構造航海度敷收支ノ明細等ハ載セラ別冊ニ具  
 ス今ヤ當會社ハ諸強國ノ特定航路トシテ巨多ノ保護  
 ヲ受クニ諸會社ノ間ニ介立シ競争日ニ盛ニシテ事

甚ニ急一日ニ忽ニスハカササレモノアリ依テ前頭ノ  
 事情御同案ノ上達ニ願意御採納被成下度此段奉願上  
 候也

明治二十九年十二月二十八日

社印

日本郵船株式會社社長

近藤 廉平 印

通信大臣子爵野村靖殿



日本帝國ハ絶東環海ノ邦明治開國以來外邦ノ海運ニ頼リ歐米百般ノ文物ヲ輸入シテ今日ノ開明ヲ致シ明治二十七八年日清戰役ノ結果愈々諸強國ノ伍伴ニ列シタルモノナレハ戰後ノ經營トシテ益々國運ノ發達ヲ計ラサルベカラス國運ノ發達ハ内ニ産業ノ隆盛ヲ促シ外ニ貿易ノ振張ヲ勉メ以テ國力増進ノ基礎ヲ築クニ在リ而シテ産業ノ隆盛貿易ノ振張成テ交通機關ノ作用ニ頼ラズンハアラズ帝國ハ邦土環海一ニ之ヲ海運ニ埃タザルベカラズ抑モ海運ハ産業之ニ依テ興リ通商之ニ依テ振ヒ又國防ノ後援タリ外交ノ前驅タリ國力増進ノ原動機關ニシテ之ヲ助長スルハ戰後帝國ノ最モ急務トスベキ所ナリ然リ而シテ其海運ニ二種ノ別アリ第一ナ特定航路トシ第二ナ不定期航海ト爲ス特定航路ハ國家ノ必要ニ基キ直接公益ヲ目的トシ一定ノ航海ヲ爲スモノニシテ不定期航海ハ常業者ノ營利ヲ以テ直接ノ目的トシ隨意ノ航海ヲ爲スモノナリ故ニ特定航路ニアラサレハ以テ國家ノ交通機關ト爲スニ足ラス而シテ特定航路ハ營利ノ方法ニアラサルヲ以テ其事業上幾干ノ損失ヲ免レサルヲ常トス海運先進ノ國必ラス之ヲ補助シテ以テ特定航路ノ擴張ヲ務メサルハナシ今ヤ絶東環海ノ帝國カ交通ノ機關トシテ缺クヘカラサルモノハ歐洲線米國線ノ二大航路ト爲ス乃チ日本郵船株式會社カ既ニ着手スル所ノ歐洲航路米國航路是レナリ歐洲航路ハ明治二十九年三月米國航路ハ同年八月ノ創規ニ係リ此二大航

路ハ東西球ヲ聯絡スル所ノ一大公道ニシテ苟クモ帝國將來ノ海運ヲシテ戰後國家進運ノ先導機關タラシメント欲セハ是レカ永遠持續ノ基礎ヲ固メサルヘカラス之レヲ固ムルハ即チ此二大航路ヲ國家ノ特定航路ト爲シ凡ソ十ヶ年以上ノ期限ヲ定メ損失ヲ補足シ以テ其維持發達ヲ計ルニ在リ而カモ之ヲ爲ス最モ急ナルヲ要ス何トナレハ航海獎勵法ノ設ケアリト雖トモ其制タル船齡ニ從ヒ年々金額ヲ遞減スルヲ以テ素ヨリ其損失ヲ償フニ足ラサルノミナラス本來國家必要ノ機關タル特定航路ヲ待ツノ道ニアラス賴テ以テ此二大航路ノ基礎ヲ固ムルニ由ナシ一會社ノ資力ハ限リアリ今ニシテ速ニ助長ノ道ヲ取ルニアラサレハ到底其損失ニ堪ヘス數年ナラスシテ廢絶ノ止ムヲ得サルニ陥ルハ必至ノ理數ナレハナリ果シテ事茲ニ臻ラン乎帝國航業ノ信用ヲ世界ニ失ヒ假令他日再興ヲ計ントスルモ蓋シ至難ノ業ニ屬スヘシ帝ニ國運ノ發達ヲ阻害スルノミナラス竟ニ光輝アル戰後帝國ノ面目ヲ奈何セン今ニ於テ深ク考慮スル所ナクシテ可ナランヤ依テ茲ニ歐米二大航路ヲ國家ノ特定航路ト爲シ以テ其維持擴張ノ計ヲ立ツルニ幾千ノ國費ヲ要スヘキ乎開航以來ノ實蹟ニ徴シテ試算スルニ歐州航路ニハ每年金貳百六拾貳萬八千四拾八圓米國航路ニハ每年金七拾七萬壹千貳百八拾八圓總計金參百參拾九萬九千參百參拾六圓ノ不足アリ此不足ハ即チ國家ノ助成ヲ要スヘキモノトス是レヲ各航路ノ現狀ニ就キ各其使用スヘキ適當ナル船舶ノ種類構造及ヒ事業豫算ノ細目ヲ説明スルコト左ノ如シ

### 歐洲航路

此航路ニハ現今數多ノ定期航海船アリ即チ英ノ彼阿會社、佛ノ「メサゼリー」會社、伊ノ「ルバルチノ」會社、澳ノ「オーストロ、ハンガリー、ロイド」會社、獨ノ北日耳曼「ロイド」會社等其最タルモノニシテ共ニ國家ヨリ饒多ノ保護ヲ受ケ孰レモ構造完美速力高度ノ船舶ヲ用ヒ或ハ專ラ旅客ノ運送ヲ目的トシ或ハ貨物ノ運送ヲ主トシ相競フテ航權ノ伸張ヲ勉ム今此間ニ立テ新ニ航路ヲ開ク所以ノモノハ期スル所其航路ヲシテ完全ナル郵便線路ト爲シ進ンテ以上ノ諸會社ニ凌駕セントスルニ在リ然レトモ之ヲ國力ノ程度ニ顧ミ先以テ其前驅トシテ貨物ノ運送ヲ主トシ兼テ旅客ヲ搭載スルニ適當ナル船舶ヲ使用スルヲ得策ナリト認ムルニ依リ此航路ニハ優等ナル貨物旅客兼用ノ船舶ヲ用ユルモノトス

### 歐洲航路ニ用ユル汽船ノ構造大要

一此航路ニ用ユル汽船ハ貨物旅客兼用ノ目的ヲ以テ構造シ其構造法ハ帝國政府ノ造船規程及英國商務院ノ船舶検査規則ニ適合シ且ツ英國ロイド協會船舶登録簿ノ最上級ニ相當スルニ要ナリトスル總テノ資格ニ適合セシムヘキ事



一其船體豫定ノ尺度噸數等次ノ如シ

長

四百四拾五呎

幅

四拾九呎貳吋

深

參拾參呎六吋

總噸數

五千八百噸

登簿噸數

參千六百噸

重量噸數

七千參百噸

方積噸數

八千六百四拾噸

石炭庫ノ容量

壹千五百四拾噸

實馬力

參千五百

輕貨喫水最強速力

拾四海里

一船體ハ鋼ヲ以テ作り上甲板及正甲板ノ兩甲板ヲ有シ各甲板全通鋼製ニシテ其大氣ニ曝ラス所ノ上甲板ハ全部「チーク」材ヲ以テ張包ミスル事

一上甲板ニ船首樓、船橋樓、船尾樓及艙部最後ノ艙口ノ前方ニ鋼製ノ甲板室ヲ設クル事  
一船橋樓ノ樓上ニ一室二人宛ノ客室八室同樓下ニ二室合セテ上等船客二十人ヲ容ルヘキ適意

ナル客室ヲ設ケ又之ニ相當スル會食室、喫煙室、男女浴室及運轉手室、機關手室、事務長室、醫員室、賄頭室、士官食堂其他給仕人等ノ部屋ヲ該樓ノ樓上樓下ニ排置スル事

一船橋樓上ノ客室ノ上ニ輕甲板ヲ張り其甲板上ノ前部ニ船長室、海圖室及舵取室ヲ設クル事  
一甲板室内ニ一室六人入二室四人入一室又船尾樓内ニ同二人入一室合セテ中等船客十八人ヲ容ルヘキ恰好ノ客室ヲ設ケ其會食室ハ甲板室内ニ置ク事

一船尾樓内ニハ事務員室、修業生室、中等船客用浴室、日本食堂、倉庫、下等船客浴場等ヲ設ケ又船尾樓ヨリ中甲板ニ通スル昇降口ヲ作ル事

一船首樓内及其直下ノ中甲板前部ニ水火夫ノ部屋及氷室其他船用品各種ノ倉庫ヲ設クル事  
一中甲板最後ノ一區ニ一室六人宛ノ船室三室合セテ特別下等船客十八人ヲ容ルヘキ恰好ノ船室ヲ設ケ又普通下等船客凡百五十人ヲ容ルヘキ常設ノ船客棚及諸附屬具ヲ整備シ且ツ中甲板ノ各區ニ隨時下等船客席ニ充ツルノ準備トシテ船窓ヲ開ク事

一船内ニ八箇ノ支水隔壁ヲ設ケ船ノ或ル區劃ニ浸水スルモ船體沈没ノ虞ナキ様船ヲ九箇ノ防水區劃ニ仕切り船底ハ壓艙水ノ用ト一ハ安全ヲ圖ルカ爲メニ全通三重底トスル事

一推進機ハ一方ニ不測ノ變アルモ尙ホ他ノ一方ニ依リテ推進シ得ヘク且ツ狹隘ナル水路又ハ港内ニ於テ船舶ヲシテ其進退操縱ヲ容易ナラシムル便利ト安全ヲ謀リ雙螺旋式ヲ用ヒ貨物



發航地	到着地	航海哩數	航海時間	碇泊時間	記事
コロマボ	新嘉坡	一、五七〇	五夜 五二三時	一 〇〇時	
新嘉坡	香港	一、四四〇	五 一一	一 〇〇	
香港	神戶	一、四四〇	一 〇八	一 九一七	
神戶	橫濱	三三〇	四 四〇七	三 三一七	
復航計		一一、五〇五	九 〇〇九	八 一一五	
合計		二三、四八六			

右表ノ如ク歐洲航路一往復航ノ航海日數九十日各港碇泊日數八十二日合計百七十二日外ニ每航入渠修繕日數凡ソ十日ヲ要スヘキニ依リ一往復航ノ總日數百八十二日即ケ六ヶ月ヲ費ス豫定ナリ是ヲ以テ一艘一ケ年二回十二艘ニテ一ケ年二十四回即チ毎月二回ノ定期航海ヲ爲スモノトス

歐洲航路一往復航收支豫算明細書  
支出之部

費目	金額	合計
一往航橫濱ニ於ケル諸費	七〇〇〇	八二〇〇〇
出港手数料	五〇〇〇	
通船料、人足賃、洗濯費其他雜費	二五〇〇〇	二〇、四三五〇〇
飲水代	一五〇〇〇	
計		
一往航神戶ニ於ケル諸費	二二〇〇〇	
入出港手数料	二二〇〇〇	
健體診査料及健康保證書料	一一六〇〇	
瀬戸内水先料	二五〇〇	
通船料、人足賃、洗濯費其他雜費	一五〇〇〇	
飲水代	二〇九〇〇	
計		
一往航門司ニ於ケル諸費	二二〇〇〇	
石炭消費高一日五拾五噸ノ割往航倫敦マテ航海日數四十五日九時間分貳千四百九拾六噸外ニ貳百五拾噸ヲ碇泊中理火用及雜用トシ計貳千七百四拾六噸ヲ購入ス此代壹噸金參圓八拾錢ノ割入出港手数料		

費目	金額	合計
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	二〇〇〇	四七〇〇
飲水代	五〇〇	
計		
一往航香港ニ於ケル諸費		一七二〇〇
入出港領事館手数料	五〇〇	
燈臺稅(登簿噸數壹噸貳錢五厘ノ割)	九〇〇	
健康診査料及健康保證書料	二二〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	二五〇	
水先料	一〇〇	
飲水代	二〇〇	
計		
一往航新嘉坡ニ於ケル諸費		
入出港領事館手数料	五〇〇	
海峽及錫蘭島バース燈臺稅(登簿噸數壹噸四錢四厘ノ割)	一五八〇	
健康保證書料	一六〇	
水先料	五七〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	二〇〇	
飲水代	二〇〇	
計		
一往航「コロムボ」ニ於ケル諸費		二七六〇〇
港稅	二二〇	
健康保證書料	四三〇	
水先料	四五〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	三〇〇	
飲水代	四七〇	
計(壹留比金五拾六錢替)		一六〇〇〇
一往航蘇西及「ボートセツド」ニ於ケル諸費		一三、五一八〇〇
蘇西運河稅噸數參千八百貳拾噸壹噸九法ノ割	三四三八〇	
燈臺稅及關稅	一、二七二、五〇	
健康診査料及健康保證書料	六九五〇	
飲水代	一〇〇、〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	七五、〇〇	
水先人手當金	五〇、〇〇	
電燈借用料	二〇一、〇〇	
計(壹法金參拾七錢五厘替)	三六、〇四八、〇〇	
一往航馬耳塞ニ於ケル諸費		

費目	金額	合計
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	二〇〇〇	四七〇〇
飲水代	五〇〇	
計		
一往航香港ニ於ケル諸費		一七二〇〇
入出港領事館手数料	五〇〇	
燈臺稅(登簿噸數壹噸貳錢五厘ノ割)	九〇〇	
健康診査料及健康保證書料	二二〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	二五〇	
水先料	一〇〇	
飲水代	二〇〇	
計		
一往航新嘉坡ニ於ケル諸費		
入出港領事館手数料	五〇〇	
海峽及錫蘭島バース燈臺稅(登簿噸數壹噸四錢四厘ノ割)	一五八〇	
健康保證書料	一六〇	
水先料	五七〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	二〇〇	
飲水代	二〇〇	
計		
一往航「コロムボ」ニ於ケル諸費		二七六〇〇
港稅	二二〇	
健康保證書料	四三〇	
水先料	四五〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	三〇〇	
飲水代	四七〇	
計(壹留比金五拾六錢替)		一六〇〇〇
一往航蘇西及「ボートセツド」ニ於ケル諸費		一三、五一八〇〇
蘇西運河稅噸數參千八百貳拾噸壹噸九法ノ割	三四三八〇	
燈臺稅及關稅	一、二七二、五〇	
健康診査料及健康保證書料	六九五〇	
飲水代	一〇〇、〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	七五、〇〇	
水先人手當金	五〇、〇〇	
電燈借用料	二〇一、〇〇	
計(壹法金參拾七錢五厘替)	三六、〇四八、〇〇	
一往航馬耳塞ニ於ケル諸費		

費目	金額	合計
噸稅(登簿噸數壹噸法六參ノ割)	三、八一六、〇〇	
水先料(登簿噸數壹噸拾七參ノ割)	六二二、〇〇	
檢査料(登簿噸數壹噸拾五參ノ割)	五四〇、〇〇	
入出港料、緊船料及拔錨料	四〇〇、〇〇	
健康保證書料及稅關費	八二、〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	七五、〇〇	
計	五、一六五、〇〇	一、九三七、〇〇
一往航倫敦ニ於ケル諸費		
石炭消費高一日英國炭四拾噸ノ割復航新嘉坡マテ航海日數三十二日十八時間分千參百拾噸外二百參拾噸ヲ碇泊中埋火用及雜用トシ計千四百四拾噸ノ内九百四拾噸ヲ購入ス此代四百七拾磅壹噸拾志ノ割	〇、一二〇、〇一	
入出港領事館手数料	一〇五、〇〇、〇〇	
緊船所入船料及噸稅等(登簿噸數壹噸七片ノ割)	九三、〇〇、〇〇	
水先料及曳船料	二〇、〇〇、〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	一一、一〇、〇〇	
飲水代	三二、〇〇、〇一	
計(壹磅金九圓四拾壹錢貳厘替)		二、一七五、〇〇

一英國ノ一港又ハ大陸ノ一港ニ於ケル諸費		
緊船場入船料及噸稅等(登簿噸數壹噸拾片ノ割)	一五〇、〇〇、〇〇	
水先料及曳船料	三七、〇〇、〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	一〇、〇〇、〇〇	
計	一九七、〇〇、〇〇	一、八五四、〇〇
一「アントゥアア」ニ於ケル諸費		
緊船場入船料及噸稅等	一、六九六、〇〇	
水先料及曳船料	一、八二二、〇〇	
健康保證書料	二〇、〇〇	
入出港領事館手数料	六、〇〇	
飲水代	二五〇、〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	一二五、〇〇	
計	三、九一九、〇〇	一、四七〇、〇〇
一復航「ボートセッド」及蘇西ニ於ケル諸費		
石炭五百噸ヲ購入ス此代英貨四百貳拾五磅壹噸拾七志ノ割	三四、三八〇、〇〇	
蘇西運河稅	一、二七二、五〇	
燈臺稅及關稅	二八、〇〇	
健康診査料	一〇〇、〇〇	
飲水代		
計		四、〇〇〇、〇〇

費目	金額	合計
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	七五、〇〇	
水先人手當金	五〇、〇〇	
電燈借用料	二〇一、〇〇	
計	三六、〇〇六、五〇	一三、五〇二、〇〇
一復航「コロムボ」ニ於ケル諸費		
港 税	一二〇、〇〇	
健康保證書料	一〇、五〇	
水 先 料	四五、〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	三〇、〇〇	
飲 水 代	四七、〇〇	
計	二五二、五〇	一四一、〇〇
一復航新嘉坡ニ於ケル諸費		
石炭消費高一口五拾五噸ノ割新嘉坡ヨリ香港マテ航海時間五日十一時間		
分參百貳噸五合外ニ參拾噸五合ヲ碇泊中埋火用及雜用トシ計參百參拾參		
噸ヲ購入ス此代壹噸金八圓貳拾錢ノ割		
入出港領事館手数料	一五八	二、七三一、〇〇
海峽及錫蘭島ハリス燈塔稅	五〇〇	
健康保證書料	三〇〇	
水 先 料	五七、〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	二〇〇	
飲 水 代	二〇〇	
計	二〇〇	一六三、〇〇
一復航香港ニ於ケル諸費		
石炭消費高一口五拾五噸ノ割橫濱マテ航海時間六日十九時間分參百七拾		
參噸外ニ參拾七噸ヲ碇泊中埋火用及雜用トシ計四百拾噸ヲ購入ス此代壹		
噸金五圓八拾錢ノ割		
入出港領事館手数料	五〇〇	二、三七八、〇〇
燈 臺 稅	九〇〇	
健康診査料	一〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	二五〇	
水 先 料	一〇〇	
飲 水 代	二〇〇	
計	一六〇〇	一六〇、〇〇
一復航神戸ニ於ケル諸費		
入出港手数料	二二〇	
瀬戸内水先料	一一六	
計	三三六	

十四

費目	金額	合計
一復航香港ニ於ケル諸費		
石炭消費高一口五拾五噸ノ割橫濱マテ航海時間六日十九時間分參百七拾		
參噸外ニ參拾七噸ヲ碇泊中埋火用及雜用トシ計四百拾噸ヲ購入ス此代壹		
噸金五圓八拾錢ノ割		
入出港領事館手数料	五〇〇	二、三七八、〇〇
燈 臺 稅	九〇〇	
健康診査料	一〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	二五〇	
水 先 料	一〇〇	
飲 水 代	二〇〇	
計	一六〇〇	一六〇、〇〇
一復航神戸ニ於ケル諸費		
入出港手数料	二二〇	
瀬戸内水先料	一一六	
計	三三六	

十五

職名	人員	給料	爲替差金	手当	一人合計給與額
船長	1	200	41	80	321
壹等運轉手	1	110	23	0	133
貳等運轉手	1	70	14	0	84
參等運轉手	1	60	2	0	62
四等運轉手	1	25	0	15	40
生徒	2	5	0	7	12
舵取	1	20	0	7	27
舵取	1	20	0	7	27
舵取	1	20	0	7	27
水夫長	1	22	0	7	29
大工	1	20	0	7	27
大工	1	15	0	7	22
甲板方倉番	1	4	0	7	11
ランナ方	1	0	0	7	7
水夫	2	0	0	7	14
水夫	2	0	0	7	14
水夫	1	8	0	7	15

十七

費目	金額	合計
通船料、入足賃、洗濯賃其他雜費	250	188000
飲水代	150	
計	400	400000
一復航橫濱ニ於ケル諸費	250	
入港手數料	150	500000
通船料、入足賃、洗濯賃其他雜費	250	
計	400	800000
一往復航本船ニ於ケル仕拂雜費	200	
各港ニ於テ乘組職員上陸諸費	200	360000
各港ニ於テ得意先接待費	100	
計	300	800000
一船稅(登簿噸數壹噸拾五錢ノ割六ヶ月分)	100	
一甲板部、機關部及事務部需用品 六ヶ月分	300	800000
一通常修繕費 六ヶ月分	300	
一入渠修繕費(壹ヶ年二回一回八千圓ノ割六ヶ月分)	300	800000
一乘組職員給料及手當	300	

十六





費目	金額	合計
船長以下五人(口印ノ分)壹人壹ヶ月六拾圓ノ割 運轉手以下拾四人(△印ノ分)壹人壹ヶ月參拾圓ノ割 水火夫等九拾六人壹人壹ヶ月九圓ノ割	三〇〇〇〇〇 四二〇〇〇〇 八六四〇〇〇 一、五八四〇〇〇	九、五〇四〇〇〇 二、七八四〇〇〇
計 六ヶ月分		
一 豫備費 船費總額ノ貳分五厘	二二、七一三〇〇〇	
一 減價引除金 船價百分ノ五箇ノ割	二一、七一三〇〇〇	
一 保險積立金 船價百分ノ五箇ノ割	二一、七一三〇〇〇	
一 大修繕積立金 船價百分ノ參箇ノ割	一三、〇二七〇〇〇	五六、四五三〇〇〇
合 計 壹往復航總船費	一七〇、五八〇〇〇〇	
一本 店 費 總支出額ノ拾分ノ壹	五二、七九七〇〇〇	
一 橫濱支店費 總支出額ノ拾分ノ貳	五、二〇七〇〇〇	
一 神戸支店費 總支出額ノ拾分ノ貳	六、六八七〇〇〇	
一 下關支店費 總支出額ノ拾分ノ壹	一、二六八〇〇〇	
一 香港支店費 總支出額ノ六分ノ貳	八、一二七〇〇〇	
一 倫敦支店費 總支出額ノ全部	五二、三五八〇〇〇	
計 壹ヶ年貳拾四往復航分 此壹往復航分	一、二六、三三四〇〇〇	五、二六四〇〇〇

一 新嘉坡代理店費 新聞廣告料及電信料 代理店手数料	一〇〇〇〇〇 一〇〇〇〇〇	二〇〇〇〇〇
一 「コロムボ」代理店費 新聞廣告料及電信料 代理店手数料	一六八〇〇〇 一一二〇〇〇	二八〇〇〇〇
一 蘇西代理店費 電 信 料	一五〇、〇〇〇	五六〇〇〇
一 馬耳塞代理店費 新聞廣告料及電信料 代理店手数料	五六〇〇〇 九九〇〇〇	一五五〇〇〇
一 英國ノ一港又ハ大陸ノ一港ニ於ケル代理店費 新聞廣告料及電信料 代理店手数料	四七〇〇〇 一四八〇〇〇	一九五〇〇〇
一 「アントツアア」代理店費 新聞廣告料及電信料 代理店手数料	五六〇〇〇 九九〇〇〇	一五五〇〇〇
合 計 壹往復航店費		六、三〇五〇〇〇
支出總計 壹往復航海陸費總額		一七六、八八五〇〇〇

收入之部

科	目	金額	合計
一往航日本ニ於ケル運賃		一、八〇〇、〇〇〇	
香港新嘉坡「コロムボ」行荷物六百噸壹噸金參圓ノ割		一五、〇〇〇、〇〇〇	
歐洲行荷物千五百噸、壹噸金拾圓ノ割		三、五〇〇、〇〇〇	
歐洲行船客上等拾人、壹人金參百五十拾圓ノ割		二、五〇〇、〇〇〇	
歐洲行船客中等拾人、壹人金貳百五十拾圓ノ割		二、〇〇〇、〇〇〇	
歐洲行船客下等貳拾人、壹人金百圓ノ割		七〇〇、〇〇〇	
一往航、香港、新嘉坡「コロムボ」ニ於ケル運賃		一、六五〇、〇〇〇	
香港新嘉坡「コロムボ」間荷物參百五十拾噸、壹噸貳圓ノ割		一、六五〇、〇〇〇	
香港歐洲間荷物百五十拾噸、壹噸拾壹圓ノ割		一、六〇〇、〇〇〇	
新嘉坡歐洲間荷物貳千噸、壹噸拾六志ノ割		一、二〇〇、〇〇〇	
コロムボ歐洲間荷物千五百噸、壹噸拾六志ノ割		二、八〇〇、〇〇〇	
計		二八、七〇三、〇〇〇	
一復航歐洲ニ於ケル運賃		五九、二九四、〇〇〇	
日本行荷物六千噸、壹噸貳拾壹志ノ割英貨六千三百磅		一、七五〇、〇〇〇	
日本行船客上等五人、壹人金參百五十拾圓ノ割		一、二五〇、〇〇〇	
日本行船客中等五人、壹人金貳百五十拾圓ノ割		一、〇〇〇、〇〇〇	
日本行船客下等拾人、壹人金百圓ノ割		六三三、二九四、〇〇〇	
合計		一一六、七九七、〇〇〇	
内荷物船客費トシテ貳割ヲ引去ル		二二、三五九、〇〇〇	
差引		九三、四三八、〇〇〇	
壹往復航純收入高		八三、四四七、〇〇〇	

收支差引 壹往復航損失高

右歐洲航路ハ收支豫算明細書ニ示ス如ク其一往復航ノ支出ハ金拾七萬六千八百八拾五圓ニシテ之ニ對スル收入ハ金九萬參千四百參拾八圓ナリ差引一往復航ニ付金八萬參千四百四拾七圓ノ損失トナル此外ニ一艘ノ船價金八拾六萬八千五百圓ニ對スル金利渺クモ年六朱トシ一往復航分金貳萬六千五百圓ヲ要ス之ヲ合算スレハ一往復航ノ不足高金拾萬九千五百貳圓トナリ此十二艘ニケ年二十四往復航ノ不足高總計金貳百六拾貳萬八千四拾八圓トス是則チ此歐洲航路ニ對シ助成ヲ要スル金額ニシテ之ヲ一ケ年ノ航海湮數五拾六萬參千六百六拾四海里ニ對當レハ一海里ニ付金四圓六拾六錢貳厘ニ當ル

米國航路

此航路ニハ現今數多ノ定期航海船アリ即チ太平洋郵便汽船會社、東西洋汽船會社、加奈陀太平洋鐵道會社等其主ナルモノニシテ就中加奈陀太平洋鐵道會社ノ如キハ鉅額ノ助成ヲ受ク雄大ナル巡洋艦ヲ使用シテ米亞兩洲間ノ航海ニ從事ス本航路ハ東西ノ兩球ヲ聯絡スル大貫線ニシテ以上ノ諸會社孰レモ北亞米利加大陸ヲ橫斷スル諸鐵道ト聯絡セラルハナシ是ニ於テ曩ニ米國諸鐵道中東部ニ達スル捷路ヲ有シ太平洋岸「シアトル」ニテ以テ其終點トナセル基礎確實ナル大北鐵道會社ヲ擇ヒ先ツ以テ之ト海陸連絡ノ約ヲ爲シ此航路ヲ開始セリ蓋シ時ニ適スル相當ノ處置ト謂フヘシ然レトモ終局ノ目的ハ是ニ止マラス北米合衆國ニ向テハ今ノ加奈陀太平洋鐵道會社ノ船舶ニ勝ル優等ノ艦船ヲ以テ更ニ優勢ナル定期航路ヲ開クニ在リ然レトモ現今ノ國力ニ顧ミルニ其所期ヲ達スルニハ漸ク遂テ之ニ進マサル可カラス依テ先ツ其前驅トシテ最優等ナル旅客貨物兼用ノ船舶ヲ用ユルモノトス

米國航路ニ川ユル汽船ノ構造大要

一此航路ニ川ユル汽船ハ旅客貨物兼用ノ目的ヲ以テ構造シ其構造法ハ帝國政府ノ造船規程及英國商務院ノ船舶検査規則ニ適合シ且ツ英國ロイド協會ノ船舶登録簿ノ最上級ニ相當シ又

北米合衆國政府ノ船客搭載規則ニモ要用ナリトスル總テノ資格ニ適合セシムヘキ事

一其船體豫定ノ尺度噸數等次ノ如シ

長	四百五拾呎
幅	五拾呎
深	參拾呎
總噸數	五千六百參拾噸
登簿噸數	參千壹百噸
重量噸數	六千噸
方積噸數	七千九百四拾參噸
石炭庫ノ容量	壹千五百九拾六噸
實馬力	四千五百
輕貨喫水最速力	拾五海里

一船體ハ鋼ヲ以テ作り上甲板、正甲板及下甲板ノ三甲板ヲ有シ各甲板全通鋼製ニシテ其大氣

ニ曝ラス所ノ上甲板ハ全部「チーク」材ヲ以テ張包ミスル事

一上甲板ニ船首樓、船尾樓及長大ナル船橋樓ヲ建設スル事

一船橋樓内前部ニ一室二人宛ノ客室十六室同三人宛ノモノ六室合セテ上等船客五十人ヲ容ルヘキ適意ナル客室及男女浴室等ヲ設ケ又之ニ相當スル會食堂、談話室、喫烟室及醫員室ヲ該樓上ノ遊歩甲板上ニ設クル事

一船橋樓内後部ニ郵便官吏室、運轉手室、機關手室、事務長室、事務員室、賄頭室、修業生室其他料理人、給仕人等ノ部屋ヲ設クル事

一船尾樓内ニ一室六人宛ノモノ二室、同八人入一室合セテ特別下等船客二十人ヲ容ルヘキ恰好ノ客室及水夫夫ノ部屋ヲ設クル事

一船首樓内ニハ舵取、水夫長、大工、荷物方等ノ部屋及船用各種ノ倉庫ヲ設クル事

一中甲板ノ一區ニ下等船客二百八十人ヲ容ルヘキ常設ノ船客棚及諸附屬具ヲ整備シ且中甲板ノ各區ニ隨時下等船客席ニ充ツルノ準備トシテ相當ノ舷窓ヲ開ク事

一船内ニ六箇ノ支水隔壁ヲ設ケ艙ノ或ル區劃ニ浸水スルモ船體沈没ノ虞ナキ様艙ヲ七箇ノ防水區劃ニ仕切り船底ハ艙艙水ノ用ト一ハ安全ヲ圖ルカ爲メニ全通二重底トスル事

一推進機ハ一方ニ不測ノ變アルモ尙ホ他ノ一方ニ依リテ推進シ得ヘク且狹隘ナル水路又ハ港内ニ於テ船舶ヲシテ其進退操縱ヲ容易ナラシムル便利ト安全ヲ謀リ雙螺旋式ヲ用ヒ貨物滿載ノ時一時間平均十三海里ノ速力ヲ以テ推進シ得ルニ足ル新式ノ汽機及汽罐ヲ備フル事

一航海中船體ノ取捨ヲ防ク爲メ船底兩側ノ彎曲部ヘ翅板ヲ取付クル事

一艙口、載貨扉及附屬具ハ總テ荷役ノ便利ヲ旨トシ各艙口ニ捲揚機及起重材各二組宛ヲ備付クル事

一石炭庫ノ内機關室ノ前部ニアル一庫ハ必要ノ場合ニ於テハ貨物艙ニ轉用シ得ヘキ構造トスル事

一諸室及船艙ハ大氣ノ流通ヲ好クスルノ外機械力ノ氣通法ヲ作り又諸室ハ瀛力給温ノ準備ヲ爲ス事

一食用品ノ新鮮ヲ保ツ爲メ船中ニ凍冷機及冷氣室ヲ設クル事

一船中ニハ一切電燈ヲ點スルコトトシ且ツ夜間貨物ノ取扱ヲ爲スニ便利ナラシムル爲メ燭力充分ナル荷役用電燈若干ヲ備フル事

一各艙、各室ニ通ツル蒸氣應用ノ消火機ヲ備ヘ其他消防ニ必要ナル裝置ヲ整備スル事

一在船中ノモノニ對スル十分ナル救命艇及救命帶ノ準備向キヨリ其他人生ノ安全ト適意ヲ保ツヘキ百般ノ要具ヲ備フル事

一此船舶代價ハ二般金百參萬圓即チ英貨拾萬九千五百磅トス

右掲クル所ノ瀛船三艘ヲ以テ毎月一回橫濱ヲ發シ布哇ヲ經米國シアトルニ到リ夫ヨリ橫濱ニ

歸着シ更ニ神戸ヲ經香港ニ達シ再ヒ門司神戸ヲ經テ横濱ニ到ル香港米國間ノ定期航海ヲ開ク  
 モノトス然レトモ便覽ノ爲メ香港米國ヲ兩終點トシ發着表ヲ製ス即チ其寄港場、湮程并ニ航  
 海及碇泊時間次ノ如シ

米國航路船舶發着表

發航地	到着地	航海湮數	航海時間	碇泊時間	記
香港	門司	一、二〇〇	三二〇時	二〇〇時	
門司	神戶	二四〇	一八〇	四〇〇	
神戶	橫濱	三五〇	一〇三	四〇〇	
橫濱	布哇	三、四〇〇	一〇三二	二〇〇	
布哇	シヤトル	二、四〇〇	七二七	八一六	
往航計		七、五九〇	二四〇八	二〇一六	
シヤトル	橫濱	四、三〇〇	一三一九	六〇〇	
橫濱	神戶	三五〇	一〇三	四〇〇	
神戶	香港	一、四四〇	四一五	八一	
復航計		六、〇九〇	一九二三	一八一	
合計		一三、六八〇	四三三二	三九〇三	

右表ノ如ク香港米國間一往復航ノ航海日數四十四日碇泊日數三十九日合計八十三日ナリ外ニ

二往復航毎ニ入渠修繕日數凡十日ヲ要スヘキニ依リ此半數五日ヲ加フレハ一往復航ノ總日數  
 八十八日即チ凡三ヶ月ヲ費ス豫定ナリ是ヲ以テ一艘一ヶ年四回三艘ニテ一ヶ年十二回即チ每  
 月一回ノ定期航海ヲ爲スモノトス

米國航路一往復航收支豫算明細書  
 支出之部

費目	金額	合計
一往復航香港ニ於ケル諸費	四	
入出港領事館手数料	五〇〇〇	
燈臺稅(登簿噸數壹噸貳錢五厘ノ割)	七八〇〇	
健體診査料及健康保證書料	三六〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	二五〇〇	
水先料	五〇〇	
飲水代	二〇〇	
計	一六九〇〇	
一往復航門司ニ於ケル諸費		一六九〇〇

費目	金額	合計
石炭消費高登口八拾噸ノ割壹往復航ノ航海日數四十三日二十一時間分參千五百拾噸外ニ參百六拾噸ヲ碇泊中埋火用及雜用トシ計參千八百七拾噸ヲ購入ス此代壹噸金參圓八拾錢ノ割	二二〇〇〇	一四、七〇六〇〇
入出港手數料	二〇〇〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	五〇〇〇	四七〇〇〇
飲水代	五〇〇〇	
計		
一往航神戸ニ於ケル諸費	二二〇〇〇	二二四〇〇〇
入出港手數料	二二〇〇〇	
瀬戸内水先料	二六〇〇〇	二二四〇〇〇
健體診査料及健康保證書料	三六〇〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	二五〇〇〇	二二四〇〇〇
飲水代	一五〇〇〇	
計		
一往航横濱ニ於ケル諸費	二二〇〇〇	二二四〇〇〇
入出港手數料	二二〇〇〇	
健康保證書料	三二〇〇〇	二二四〇〇〇
湯船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	五〇〇〇	
飲水料	二〇〇〇〇	二二四〇〇〇
計		
一往航布哇ニ於ケル諸費	三三〇〇	六三七〇〇〇
入出港領事館手數料	三〇〇〇	
水先料	一〇〇、〇〇〇	六三七〇〇〇
健體診査料及健康保證書料	四一、〇〇〇	
埠頭稅(登簿噸數壹噸貳仙ノ割貳日分)	二二四、〇〇〇	六三七〇〇〇
港長及入出港手數料	二五、〇〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	三三、〇〇〇	六三七〇〇〇
計、壹弗金壹圓九拾四錢八厘替	三三八、〇〇〇	
一英國「シャートル」ニ於ケル諸費	三、〇〇〇	六三七〇〇〇
入出港領事館手數料	一八六、〇〇〇	
噸稅(登簿噸數壹噸六仙ノ割)	一一、〇〇〇	六三七〇〇〇
健體診査料	三〇〇、〇〇〇	
水先料	七〇、〇〇〇	六三七〇〇〇
石炭千九百參拾五噸替費(壹噸壹弗四拾八仙半ノ割)	三、四四三、四八	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	三、四四三、四八	六、六八六〇〇〇
計		六、六八六〇〇〇

費目	金額	合計
湯船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	五〇〇〇	二二四〇〇〇
飲水料	二〇〇〇〇	
計		
一往航布哇ニ於ケル諸費	三三〇〇	六三七〇〇〇
入出港領事館手數料	三〇〇〇	
水先料	一〇〇、〇〇〇	六三七〇〇〇
健體診査料及健康保證書料	四一、〇〇〇	
埠頭稅(登簿噸數壹噸貳仙ノ割貳日分)	二二四、〇〇〇	六三七〇〇〇
港長及入出港手數料	二五、〇〇〇	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	三三、〇〇〇	六三七〇〇〇
計、壹弗金壹圓九拾四錢八厘替	三三八、〇〇〇	
一英國「シャートル」ニ於ケル諸費	三、〇〇〇	六三七〇〇〇
入出港領事館手數料	一八六、〇〇〇	
噸稅(登簿噸數壹噸六仙ノ割)	一一、〇〇〇	六三七〇〇〇
健體診査料	三〇〇、〇〇〇	
水先料	七〇、〇〇〇	六三七〇〇〇
石炭千九百參拾五噸替費(壹噸壹弗四拾八仙半ノ割)	三、四四三、四八	
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	三、四四三、四八	六、六八六〇〇〇
計		六、六八六〇〇〇

職名	人員	給料	爲替差金	手当	當一人合計給與額	金額	合計
船長	1	200	4	50	294	294.00	350.00
壹等運轉手	1	110	3	0	113	113.00	135.00
貳等運轉手	1	70	4	0	74	74.00	80.00
參等運轉手	1	60	2	0	62	62.00	70.00
四等運轉手	1	55	0	1	56	56.00	60.00
生徒	3	5	0	5	10	10.00	10.00
舵取	2	20	0	5	25	25.00	25.00
舵取	2	15	0	5	20	20.00	20.00
舵取	2	15	0	5	20	20.00	20.00
水夫	1	22	0	5	27	27.00	27.00
大工	1	20	0	5	25	25.00	25.00
計						200.00	350.00
各港ニ於テ得意先接待費							
一船稅(登簿噸數壹噸拾五錢ノ割參ヶ月分)							5.00
一甲板部、機關部及事務部需用品(參ヶ月分)							18.00
一通常修繕費(參ヶ月分)							4.00
一入渠修繕費(壹ヶ年二回一回八千圓ノ割參ヶ月分)							4.00
一乘組船員給料及手當							4.00

三十三

一復航神戶ニ於ケル諸費	222.00	222.00
入出港手數料	26.00	26.00
瀬戸内水先料	13.00	13.00
健體診査料及健康保證書料	25.00	25.00
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	5.00	5.00
飲水代	11.00	11.00
計	300.00	300.00
一復航香港ニ於ケル諸費	25.00	25.00
通船料、人足賃、洗濯賃其他雜費	5.00	5.00
水先料	3.00	3.00
計	33.00	33.00
一往復航本船ニ於ケル諸費	150.00	150.00
各港ニ於テ乘組船員上陸諸費		
計	97.00	97.00
合計	490.00	490.00

三十二

小機關番	火夫	火夫	石炭夫	石炭夫	見習石炭夫	小計	事務員	醫務員	事務員	荷物方	贈方	壹等洋人	貳等洋人	見習洋人	料等洋人	料等洋人	料等洋人	料等洋人	料等洋人	上等小使
一	一四	一四	一八	九	一	六二	一	一	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一四	一四	一八	九	一	五六三	〇	〇	二〇	一五	三〇	三〇	一七	一七	一五	一三	一三	一三	一三	八
〇	〇	〇	〇	〇	〇	七五	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五	五	五	五	五	五	八七	三〇	七〇	一〇	五	五	三	三	五	五	三	三	三	三	三
八	一七	一七	一三	一三	一三	八〇	七〇	三〇	二〇	二〇	二〇	二〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
一	一八	一八	一七	一七	一七	一四一三	一	一	二	二	三	三	二	二	二	二	二	二	二	二

大工	甲板方倉番	ランプ方	水夫	水夫	見習水夫	小計	壹等機關手	貳等機關手	參等機關手	參等機關手	四等機關手	見習機關手	生徒	油差	油差	油差
一	一	一	一	一	一	四三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一五	一四	一〇	〇八	〇八	〇六	六二九	一八〇	一〇	七五	三五	三〇	一五	一七	一八	一六	一四
〇	〇	〇	〇	〇	〇	九〇	三三	一五	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五	五	五	五	五	五	二二五	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二〇	一九	一五	一三	一三	一三	二二七	一三三	九〇	四五	四〇	二五	二二	二二	二二	二二	二二
二〇	一九	一五	一三	一三	一三	二二七	一三三	九〇	四五	四〇	二五	二二	二二	二二	二二	二二



費目	金額	合計
下等小使	三	三
小計	二六	二〇〇
合 計	百參拾壹人	參ヶ月分
一 乘組船員食料		
船長以下五人(口印分)壹人壹ヶ月六拾圓ノ割	三〇〇〇〇	
運轉手以下拾四人(△印分)壹人壹ヶ月參拾圓ノ割	四二〇〇〇〇	
水夫等百拾貳人壹人壹ヶ月七圓五拾錢ノ割	八四〇〇〇〇	
計	一、五六〇〇〇〇	四、六八〇〇〇〇
一 像備費		
船費總額ノ貳分五厘	二二、八七五〇〇〇	一、二二二〇〇〇
一 減價引除金		
船價百分ノ五箇ノ割	二二、八七五〇〇〇	
一 保險積立金		
船價百分ノ五箇ノ割	七、七二五〇〇〇	三三、四七五〇〇〇
一 大修繕積立金		
船價百分ノ三箇ノ割	七、七二五〇〇〇	八三、一五一〇〇〇
合 計	壹往復航總船費	
一本店費	總支出額貳拾分ノ壹	壹ヶ年分
一 橫濱支店費	總支出額拾分ノ壹	壹ヶ年分
一 神戸支店費	總支出額拾分ノ壹	壹ヶ年分
一 香港支店費	總支出額六分ノ壹	壹ヶ年分
計	壹ヶ年拾貳往復航分	
此壹往復航分	三六、四〇四〇〇〇	三、〇三四〇〇〇

三十六

科 目	金額	合計
一 布哇代理店費	二五、〇〇	
新聞廣告料及電信料	五〇、〇〇	
代理店手数料	九八〇〇〇	一四六〇〇〇
二「シヤトル」代理店費		
新聞廣告料及電信料	四二五〇〇	
代理店手数料	二〇〇、〇〇	
合 計	壹往復航店費	
支出總計	壹往復航海陸費總額	八七、五四四〇〇〇
一 往航香港及日本各港ニ於ル運賃		
布哇行荷物貳百噸、壹噸金拾圓ノ割	二、〇〇〇〇〇〇	四
計		八七、五四四〇〇〇

三十七

科	目	金額	合計
米國行荷物九百噸、壹噸金拾圓ノ割		九、〇〇〇〇〇	
布哇行下等船客百五十人、壹人金貳拾五圓ノ割		三、七五〇〇〇	
米國行上等船客參人、壹人自參拾五弗ノ割	四〇五、〇〇		
米國行中等船客五人、壹人九拾五弗ノ割	四七五、〇〇		
米國行下等船客拾人、壹人貳拾八弗ノ割	二八〇、〇〇		
計		一二、二五二〇〇	一七、〇〇二〇〇
一復航米國ニ於ル運賃			
日本香港行荷物四千噸、壹噸金六圓ノ割	一、五二五、〇〇	二四、〇〇〇〇〇	
日本香港行上等船客拾人、壹人百五十拾貳弗五拾仙ノ割	一、〇三五、〇〇		
日本香港行中等船客拾人、壹人百參弗五拾仙ノ割	一、二五〇、〇〇		
日本香港行下等船客五拾人、壹人貳拾五弗ノ割	三、八一〇、〇〇	七、三九八〇〇	三一、三九八〇〇
計			四八、四〇〇〇〇
合 計	壹往復航收入高		九、六八〇〇〇
差 引	內荷物船客費トシテ二割ヲ引去ル		三八、七二〇〇〇
收支差引	壹往復航損失高		四八、八二四〇〇

三十八

右米國航路ハ收支豫算明細書ニ示ス如ク其一往復航ノ支出ハ金八萬七千五百四拾四圓ニシテ之ニ對スル收入ハ金參萬八千七百貳拾圓ナリ差引二往復航ニ付金四萬八千八百貳拾四圓ノ損失トナル此外ニ一艘ノ船價百參萬圓ニ對スル金利尠クモ年六米トシ二往復航分金壹萬五千四百五拾圓ヲ要ス之ヲ合算スレハ一往復航ノ不足高金六萬四千貳百七拾四圓トナリ此三艘一ケ年十二往復航ノ不足高總計金七拾七萬壹千貳百八拾八圓トス是則チ此米國航路ニ對シ助成ヲ要スル金額ニシテ是ナ一ケ年ノ航海運數拾六萬四千壹百六拾海里ニ對當レハ一海里ニ付金四圓六拾九錢八厘ニ當ル

歐米二大航路特別助成ニ付再願

歐米二大航路ハ國際上貿易上共ニ重大ノ關係ヲ有シ  
國威ノ發揚國利ノ増進一トシテ之ニ係ラサルコトナシ  
故ニ當會社ハ國家交通機關タシテ任務ヲ重クシ昨午三  
月歐洲航路ヲ開キ同年八月米國航路ヲ開始シ銳意奮  
勵之シカ擴張ニ努メ事業漸ク緒ニ就クト雖モ如何モ  
ニ毎航巨額ノ損失ヲ免レズ先來斯ニ定期航海ハ政府  
ノ特定航路ト爲シ其損失ヲ補ヒ以テ永遠維持ノ道ヲ  
立テラレハ當然ノ義ト存候ニ付當會社ハ昨二十九  
年十二月二十八日歐洲航路ニ對シ毎年金貳百拾貳  
萬八千四拾八円米國航路ニ對シ毎年金七拾七萬九千  
貳百八拾八円總計金參百參拾九萬九千參百參拾六円

ノ損失額ヲ向フ十五年間助成セラレシコトヲ豫算明  
細書ヲ具シテ出願シタルニ政府ハ大體ニ於テ其願意  
ヲ容レラレタルニ其助成金ハ航海奨励法ニ依リ當然  
亨クハキ金額ニ止ムヘシ然レニ上ハ航海ノ方法即チ寄  
港地ノ選擇取捨等ハ總テ會社ノ隨意ニ任スヘシト  
ノ内意ヲ示サレタリ依テ當會社ハ其内意ニ基テ乃チ  
歐洲航路ニ使用スル船舶ハ一隻ノ總噸數五千八百噸  
速力十四海里其數十二艘一航海ノ噸數二萬二千五百  
四十六海里一十年二十六航海ノ噸數五十八萬六千百  
九拾六噸ニ對シ金額百貳拾九萬四千九百五拾七円九  
拾四錢米國航路ニ使用スル船舶一隻ノ總噸數五千六  
百三十噸速力十五海里其數三艘一航海ノ噸數一萬二  
千七百四十噸一十年十二航海ノ噸數十五萬二千八百

八拾四圓此金額ニ推計萬四千九拾七円九拾四錢總計貳百  
九拾壹萬八千九百七拾五円貳拾八錢トナルコトヲ申  
述セリ當時毎月二回即チ一十年二十四回ノ航海ヲ二  
週一回即チ一十年二十六回ニ改メタル理由ハ毎月二  
回ニテハ或ハ日曜日祝日休業ノ日ニ當リテ期日ヲ遷  
延スル等ノコトナレトセズ從テ希着時日ヲ一定スル  
能ハス終ニ是期ノ名有ラキ實十々七至ルハ之ニ及  
シ二週一回トスルハ其希着時日始終一定シテ交通及  
ビ貿易上至大ノ便利アルノ故ニレラ其後実験ヲ積ム  
ニ從テ蓋シ二週一回トスルハ必要ヲ確メタリ然ルニ  
前述航海奨励法ニ據リ特別助成金額ヲ莫出セシ際ハ  
歐洲航路船平均噸數五千八百噸ヲ標準トシタルニ今  
チ新船續ニ回着シ現行測度法ニ依リテ其噸數ヲ莫出

スルトキ、神奈川丸外十一艘平均六千九百九十七噸ト  
ナリ又御省ノ公認セラルル、航海運教ノ據レハ一航海  
二萬三千四百二十九噸ニ相成從テ其獎勵金額ハ改州  
航路ニ於テ一ヶ年二十六回ノ航海運教六十万九千百  
五十四圓ニ對シ金額百之七萬九千八百九拾四圓拾  
八錢四厘トナリ而シテ此金額々々本邦航海獎勵法、  
依リ當然亨クルヲ得ルモノトシラ之ニ對シ多クノ責  
務ヲ負担スルノ謂ナキヲ以テ其航海ノ方法即チ寄港  
地ノ選擇取捨等ハ今春内諾ヲ占ムル如ク當會社、  
一位セラシムルハ勿論ナルト信ス又米國航路ノ後  
巨新船一隻ノ總噸數五千六百三十噸ニシテ改州航路  
ニ於ケル如ク其乘著時日一定ノ必要アルニ爲メ四週一  
回其船數三艘一ヶ年十三回ノ航海トナシ其獎勵金額

ハレヤトハ直航ノ場合、於テ航海運教十四万五千三  
百四十圓此金額五拾九万参千貳百四十一圓五拾四錢  
五厘若シ常ニ布哇、寄港スレトキハ航海運教九万九  
千五百圓ヲ増シ此獎勵金七万九千五百九拾四圓拾貳  
錢五厘ヲ加フ一レ即チ改米ニ大航路ノ獎勵金額ハ總  
計参百参拾四万六千七百貳拾九圓八拾五錢四厘トナ  
ル是レ即チ獎勵法ニ依リ當然亨クルモノトシテ改  
米ニ轉路ヲ特定航路トシ其助成金ノ額ハ斯ナクトモ  
此金額ヨリ下レト得ルカラスハ勿論ナリトス  
政府ハ此金額ヲ以テ改米ニ航路助成金ノ最低度トシ  
十五ヶ年ノ期限ヲ以テ達シ特定航路ト爲シ永久持續  
ノ基ヒテ定メラレシコトヲ茲ニ昨年十二月出願以後  
ノ來歴ヲ叙シ此段再願仕候也

明治三十年十二月十日

日本郵船株式會社社長

社印

近藤 彦平 (印)

通信大臣子爵野村靖殿

歐米二大航路獎勵金明細書

一 歐洲航路

本航路ハ汽船十二艘ヲ以テ橫濱歐洲間ニ二週一回

ノ定期航海ヲ為スモノニシテ之ニ使用スル船舶總

噸數速力牽着地及寄港地航海回数及獎勵金細別左

ノ如シ

(1) 船舶總噸數及最強速力

神戶丸	總噸數	六千五百五十噸	最強速力	十四海里
博多丸	左	六千五百一十一噸	左	十四海里
河内丸	左	六千九十九噸	左	十四海里
鎌倉丸	左	六千二百二十三噸	左	十五海里
讚岐丸	左	六千百十七噸	左	十四海里
若狹丸	左	六千二百六十七噸	左	十四海里

因幡丸	總噸數	六千二百六十六噸	最速力	十四海里
丹波丸	左	六千二百六十六噸	左	十四海里
佐渡丸	左	六千二百六十六噸	左	十五海里
備後丸	左	六千二百六十六噸	左	十四海里
常陸丸	左	六千二百二十八噸	左	十四海里
信濃丸	左	六千二百六十六噸	左	十四海里
合計	十二艘	總噸數	七万四千三百六十四噸	
平均	一艘	總噸數	六千二百九十七噸	

但し神奈川丸、博多丸、河内丸、鎌倉丸、讃岐丸、及若狭丸、總噸數并ニ最速力ハ本船横濱ニ於テ測度検査リ、証船籍證書ニ登記シタル總噸數及ニ航海獎勵法施行細則第二章ノ検査ヲ受ケタル最速力ニヨリ、因幡丸、丹波丸、備

後丸、佐渡丸、及信濃丸ノ總噸數ハ若狭丸ト同形ノ船舶ニシテ當時測度検査中、四航中及築造中ナルニヨリ假ニ若狭丸ノ總噸數ニ依リテ算出シ常陸丸ノ總噸數ハ神奈川丸、博多丸、河内丸、鎌倉丸、及讃岐丸ト同形ノ船舶ナルニヨリ右五艘總噸數ノ平均額ニヨリ佐渡丸最速力ハ鎌倉丸ト同一ノ製造ナルニヨリ同船、最速力十五海里ニ據ル

(2) 帶着地及寄港地并ニ航海里數

自橫濱至神戶	航海里數	三百五十海里
自神戶至門司	左	二百四十海里
自門司至香港	左	千二百海里
自香港至新嘉坡	左	千四百四十海里

自新嘉坡至彼南	航海里数	三百九十五海里
自彼南至古倫丹	左	千二百九十八海里
自古倫丹至蘇西	左	三千四百三海里
自蘇西至おーとせと	左	八十七海里
自おーとせと至馬耳差	左	千五百八十五海里
自馬耳差至倫敦	左	二千海里
自倫敦至亞士府	左	百九十里
自亞士府至ミッドルホフ	左	三百十里
自ミッドルホフ至亞士府	左	三百十里
自亞士府至サウサレプトン	左	二百五十三海里
自サウサレプトン至おーとせと	左	三千八十八海里
自おーとせと至蘇西	左	八十七海里
自蘇西至新嘉坡	左	四千九百三十三海里

自新嘉坡至香港	左	千四百四十海里
自香港至神戶	左	千三百八十海里
自神戶至橫濱	左	三百五十海里
合計	航海里数	二万四千三百六十九海里
内内海、屬スル分	航海里数	九百四十海里
差引	獎勵金ヲ受ク、キ航海里数	二万三千四百二十九海里

(3) 各船一往復航ノ獎勵金額

金十萬八千六百六十一圓八拾四錢五厘	神戶川丸分
金十萬八千七百七十八圓二十四錢五厘	博多丸分
金十萬二千五百四十四圓十三錢	河内丸分
金十萬七千五百九十一圓八十二錢五厘	鎌倉丸分
金十萬三千二百二十四圓六十三錢五厘	讚岐丸分



金控万二千七百六十四円二十八銭 若狭丸分  
 金控万二千七百六十四円二十八銭 因幡丸分  
 金控万二千七百六十四円二十八銭 丹波丸分  
 金控万百四円五十八銭五厘 佐渡丸分  
 金控万二千七百六十四円二十八銭 備後丸分  
 金控万五百一円二銭八厘 常陸丸分  
 金控万二千七百六十四円二十八銭 信濃丸分  
 合計金百貳拾参万四千百五十四円四厘

平均一艘一往復航ノ獎勵金控万二千八百四十  
 二円八銭四厘但シ航海獎勵法第五條、依リ結  
 噸數六十噸以上最速速力十五海里以上ノ船舶  
 八總噸數一噸航海里數一千海里、付金七十五  
 銭総噸數六千噸以上最速速力十四海里以上ノ

船舶ノ總噸數一噸航海里數一千海里ニ付金七  
 十銭ノ割合ニヨリ算出ス  
 即チ一艘平均總噸數六千九百九十七噸一往復航海里  
 數二万三千四百二十九海里此獎勵金控万二千八百  
 四十二円八銭四厘  
 一今年二十六回航海里數六十万九千五百五拾四海里  
 此獎勵金二百六十七万三千八百九十四円十八銭四  
 厘

一 米國航路

本航路ハ三艘ヲ以テ毎四週一回横濱ヲ来レ布哇ヲ  
 經テ米國シヤトルニ到リ又シヨリ横濱ニ帰着シ更  
 ニ神戶ヲ經テ香港ニ達シ再ヒ門司神戶ヲ經テ横濱  
 一並ニ香港米國間ノ定期航海ヲ為スモノニシテ其

船舶總噸數、速力、乘著地寄港地及二隻船金細別左ノ

如シ  
一) 船舶總噸數及最速速力

第一船	總噸數	五千六百三十噸	最速速力	十五海里
第二船	總噸數	五千六百三十噸	最速速力	十五海里
第三船	總噸數	五千六百三十噸	最速速力	十五海里

合計三艘 總噸數一萬六千八百九十噸  
平均一艘ノ總噸數五千六百三十噸

二) 發著地及寄港地并、航海里數

自香港至神戶	航海里數	二百	海里
自門司至神戶	航海里數	二百四十	海里
自神戶至橫濱	航海里數	三百五十	海里
自橫濱至本州	航海里數	三千四百	海里

自本州至乙上ノ 左 二千四百 海里

自乙上ノ至橫濱 左 四千三百 海里

自橫濱至神戶 左 五百五十 海里

自神戶至香港 左 千三百八十 海里

合計 航海里數 一萬三千六百二十海里

内内海ノ屬ノ分 航海里數九百四十海里

差引 獎勵金ノ受ノノ航海里數

港万町千六百八十海里

三) 各船一往復航ノ獎勵金額

第一船分	金額	五萬五千七百五十六圓五十九錢
第二船分	金額	五萬五千七百五十六圓五十九錢
第三船分	金額	五萬五千七百五十六圓五十九錢
合計	金額	一十五萬五千七百五十六圓五十九錢

平均一艘一往復航ノ獎勵金五万七千七百五十二  
円五十九銭

但し航海獎勵法第五條ニ依リ総噸數五千五百噸以上最速力十五海里以上ノ船舶ノ總噸數一噸航海里數一千海里ニ付毎七十二銭五厘ノ割合ニヨリ算出ス

即チ一艘平均總噸數五千六百三十噸一往復航海里數一万二千六百八十海里此獎勵金五万七千七百五十二円五十九銭

一十年十三回航海里數十六萬四千八百四十海里此獎勵金六十七万二千八百三十五円六十七銭

但し本庄、寄港七廿ト十八航海里數一万九千五百海里ヲ減シ獎勵金七万九千五百九十四円十

二銭五厘ヲ増スルセトス

歐米ニ航路獎勵金合計即チ

歐洲航路 金貳百六十七万五千八百九十四円十八銭四厘

米國航路 金六拾七万二千八百三十五円六拾七銭  
合計金參百參拾四萬六千七百貳拾九円八拾五銭四厘

右ハ獎勵法ニ據リ亨クルヲ得ル金額ニシテ即チ向チ十五ヶ年間助成ヲ仰クハ十年額ナリ

歐米二大航路ノ特定航路トナシ之ニ對シ年々一定ノ  
助成金御下附相成候様致度旨去ル明治二十九年十二  
月二十八日出願ニ及ヒ尚又昨三十年十二月十日再願  
ニ及ヒ政府ニ於テハ願意ヲ容レラシ右議榮曾ラ一度  
帝國議會ノ御提出ニ相成候次第ニ候得者必次期ノ議  
會ニハ前意ヲ續カセラシ議案御提出ニ可相成儀ト確  
信仕候然ルニ其以來内外經濟界ノ変化頗ル甚シキモ  
ノアリ一方ニ於テハ又該々實驗上ヨリ得來ル所モ有  
之歐洲航ノ方ハ既ニ新造船モ略ホ落成致居爾後幸ニ  
各地ニ於テ相應ノ出荷有三石炭代ヲ始ノ諸物價騰貴  
シ隨テ經費ノ増加ヲ免レズ昨年十二月頃ノ豫想ニ比  
スレハ稍困難ニハ候得共仍ホ昨年十二月再願ノ節申

出置候金額ニテ維持ノ道相主可申米國航ノ方ニ至リ  
テハ當初ヨリ悉ク新造船ヲ使用スヘキモノトシ一時  
ニ之ヲ築造セトスルハ其船價前年ニ比シ大ニ騰  
貴シ從テ諸種積立金原資利子等モ多額ト相成之ニ加  
フルニ前記ノ如ク石炭以下諸種貨ノ増加甚シク假令  
收入ニ於テ多少ノ増加ヲ見ルモ到底昨年十二月再額  
ノ金額ニテハ收支相償フヘキ見込相主不申又熟ク是  
迄ノ實際ニ依リ將來ノ趨勢ヲトシ候得者此航路ニ於  
テ船客ヲ目的ト致候事ハ既ニ加藤太平洋汽船會社  
線并ニ太平洋東西洋兩汽船會社聯合線ノ在ルアリテ  
何レモ確固ナル地步ノ上ニ立テ專ラ重キヲ船客ノ運  
送ニ置キ準備接待等日ニ其便利ヲ競ヒ昨今ニテハ更  
ニ船舶ヲ改良シ一時間ニ十海里以上ヲ駛リ得一々モ

ノヲ造リテ之ニ充テトスルノ状勢ニテ達居候得者  
之ニモ凌駕ス可キ船舶ヲ以テスルニテアサレハ到底  
其目的ヲ達シ難ク然レニ如キ船舶ヲ造ルニハ第一巨  
額ノ資本ヲ要シ次ニ又其年々受クノ所ノ欽損額モ甚  
ク多ク從テ助成金ノ額モ大ニ増加セサルヲ得ス寧ロ  
重キヲ荷物ノ運送ニ置キ船舶ノ如クモ漸ク逐々之  
ヲ新造スルノ方針ヲ執リ候方今日我國内外ノ状勢ニ  
照ラレ適當ナル方策ト相認ノ候依テハ米國航ノ方ハ  
總噸數凡ソ三千五百噸速力平均拾九海里ヲ最低ノ目  
途トシ毎四週一回香港ニヤトシテ出帆シ往復トモ橫  
濱神戸兩地ニ復航ニハ明司ニモ寄港ノ豫定ヲ以テ之ニ  
對シ昨年十二月再額ノ通り年額五拾九萬參千貳百四  
拾九圓五拾四錢五厘ノ助成金御下附相成歐洲線ニ對

してハ総て昨年十二月再願、通りノ設計即今総噸數  
 平均六千九百七噸、内外最高速力拾四海里前後ヲ有  
 ス。船舶拾貳艘ヲ以テ往航ハ横濱ヲ来シ神戸、門司、香  
 港、新嘉坡、彼南ゴロニホ、スエズ、ポルトセツド、馬耳塞、倫  
 敦寄港、アエトワリ、ポ、連シ、ミツドルス、ホロ、一回航  
 し、荷物積取り再ヒ、アエトワリ、ポ、歸リ復航同地ヨリ  
 「サウザンポート」ニホ、トセツド、スエズ、新嘉坡、香港、神戸、  
 寄港横濱、着ス。航路ヲ執リ毎貳週一回雙方ヲ發ス  
 此定期ヲ踐行スル事トシ之ニ對シ昨年十二月再願通  
 リ、助成金即今年額貳百六拾七萬、去年八百九拾四、因  
 拾八錢四厘、御下附相成其期限ハ雙方トモ拾五年間  
 トシ尚又前年ノ御旨趣ヲ継キ航海ノ方法、即チ寄港地  
 ノ選擇取捨等ハ總テ當會社ノ隨意、任セラル候様致

度若し夫レ此ノ兩航路ヲ特定航路トスルノ必要ニ至  
 テハ既ニ前年未議ニ陳述仕置、政府ニ於テモ委細御  
 認定ノ上議會ニ對シ議案提出ニモ相成候義、并此ニ  
 再述不仕候前記ノ事情宜敷御酌取至急御詮議被成  
 下度此段更ニ出願仕候也

明治三十一年七月二十九日

社印 日本郵船株式會社社長 近藤廉平 印

通信大臣 林有造 殿

國立航海線助成金御下附願

華社ハ創立當初ノ方針ニ隨ヒ孫右平洋中央線路ヲ開  
通シ本邦ノ中心点トシ兼港香港ヲ兩端点トシ此全  
線路ヲ通シテ一歲十六回以上ノ定期航海ヲ保持スル  
ノ目的ヲ以テ曩ニ米國南太平洋鐵道太平洋郵船左西  
東汽船ノ三會社ニ交渉シ百方協議ヲ遂ケタル中相立  
ノ競争ヲ防ヤリ各自ノ利益ヲ保護スル爲メ公平不偏  
ノ條約ヲ結了致シ候而シテ使用ノ船數ヲ三隻トシ何  
レモ即今美國ニ於テ製造中ニ有之其明細ハ別紙ノ如  
ク總噸數凡六千速力一時向十七海里以上ニシテ其結  
構裝置共ニ郵便船トシテ太平洋中最優等ノ實格ヲ充  
備致候モ、之有之畢竟英社ノ微力ヲ以テ第一着ニ此  
優等船ヲ新造スルハ折當業上損アリテ益ナク迂濶疎

狂ノ識ヲ免レサレカ如シト雖比聊海國ノ名譽ト實繁  
 ヲ弄揚スルノ一端ト云可相成ト存シ既收支ノ債ハサ  
 ルレハ係ラズ散ラ國民ノ本方ヲ盡スノ微衷ニ出テ候  
 義ニ付本領ノ趣旨ト御意議ノ上特ニ國王線路トシラ  
 十五ヶ年向國庫ヨリ助成金御交付相成下度但助成額  
 ハ航海賃額法ニ照準シテ御計算ノ上割ニ船舶加算通  
 船ノ法ニ據テ助成年限向一定ノ金額ヲ御支給相成  
 定期郵便運搬御用社仰付候様政度此際奉願候也  
 明治三十年六月三日

東洋汽船株式会社  
 社長 浅野總一郎 (印)

通信大臣子爵野村靖殿

香港定期航海郵便船件名書

一寸法 全長 四百拾貳呎  
 幅 五拾貳呎  
 深 參拾貳呎  
 上甲板ヨリ船橋樓甲板迄ノ高 七呎拾吋  
 噸數 總噸數 凡七千噸餘  
 壹簿噸數 凡參千八百噸餘  
 製造地 カエダノラト及ニエノカニルオニタリ  
 外板材料 鋼  
 船骨材料 鋼  
 甲板 鋼



層数  
種類

四  
正甲板、上甲板、舷橋甲板、  
及プロミットデッキ

一 全部二重底

一 汽機

三聯成表面汽機、レテ汽筒ノ徑ハ貳拾八吋  
四名、一、四拾八吋及七拾五吋、レテ其行長四拾  
八吋トス

一 汽鐘

兩端汽鐘四個ト單端汽鐘一個トヲ備、前者ハ徑  
拾五呎、後者ハ徑拾五呎、長拾六呎、而シテ其壓力ハ兩者共ニ面然通  
風ニ流ラ百八拾封トス

一 推進器

雙螺旋

一 馬力

實馬力凡七千五百以上

一 速力

拾七海里餘

一 搭載旅客數

古拾人

上等

四拾五人

中等

凡五百人

下等

一 落成期

明治三十五年四月

一 回航期

明治三十五年七月

左之通、價也

國之航海線路助成金御下附録

華社ハ國運ノ伸張ニ伴ヒ太平洋上ニ郵船航路ヲ開始  
スルノ必要ヲ認メ本邦ヲ中心點トシ東港香港ヲ西端  
點トシ一歲十六回以上ノ定期航海ヲ保持スルノ目的  
ヲ以テ之ニ使用スル汽船隻ヲ英國ニ注文シタリ  
ニ其第一船ハ既ニ竣工シ来ル十月ヲ以テ本邦ニ到着  
シ第二船第三船ハ順次一箇月ヲ隔テ、回航ノ運ニ有  
之甚明細ハ別紙件名書ノ如ク總噸數凡六千噸實馬力  
七千五百、速力十七海里ニシテ上等船若九十餘名中等  
船十餘名下等千名ノ客ニ甚構造装置共ニ大郵船タル  
ノ資格ヲ具備セリモ、有之從來太平洋上ニ於ル中  
央航路ハ數十年來英米人ノ手裏ニ掌推セリ、邦人  
ノ未ダ嘗テ之ヲ經營スルモ、アラハルニ甚多遺憾ト

スル所ナリ是ヲ以テ榮社ハ敢テ力ヲ揣ラス此大事業  
ヲ籌策セテ二期ノ最ニ北米合衆國太平洋岸ヲ踏査セ  
シ其港灣ノ良好レヲ交通機關ノ整備セシ貨客集  
散ノ盛ナル實ニ東港ノ右ニ出ヅルモノ無シ今試ニ踏  
査ノ梗概ヲ舉リシハ東港ハ航賃ノ八十五ヲ占メ  
トラレドハ其百分ノ七ニヤトシタコメハ合シテ僅  
其百分ノ八ニ過キス航賃ニ至テハ殆ト東港ノ独占  
帰ス又郵便物ハ東港ヲ百分ノ八十六トシタコメハ百  
分ノ十三ニヤトシハ僅ニ百分ノ一ニ當リ又鐵道ハ  
孰ラ云ハレニタコメ及レヤトシハ聯絡スルモノハ全  
國ノ北部ニ偏シサレヤゴト通スルモノハ南部ニ偏  
シテ其經過ノ地多クハ商務未タ振ハスルヲ以テ貨客  
運搬ノ便甚ク難シ独リ東港ハ太平洋ノ中心ニ臨ミ四

通ハ遠ノ衝ニ當リ其繁盛ナル遠ク他港ノ及フ所ナ  
リナリハ世ノ熟知スル所ナリ是ニ於テ榮社ハ東港ニ  
通スルノ中央航路ヲ開始スルコトニ決シ彼ノ太平洋  
郵船及西東汽船、兩會社、交渉シ三社共ニ盟約ヲ  
締結シ其構造装置共ニ前記兩汽船會社ノ汽船ヲ凌駕  
スルニ足ルノ巨船ヲ使用シ以テ貿易ノ交通ニ通シ公  
益ヲ増進セシトス加シ船舶ハ平時ニ在テハ我對外貿  
易ノ先驅トシテ常ニ商權ヲ制スルニ足ルニシテ戰時ニ在  
テハ我海軍ノ驍尾ニ附シテ應分ノ任務ニ服スルヲ得  
ルハ其榮社ノ私ニ期スル所ニ有之然レハ營業上收支  
相償ハス為メニ或ハ疎狂ノ誠ヲ免シサルカ如シト雖  
民聊カ國家ニ尽スノ微衷ニ出テ候儀ニ付前陳ノ事實  
御諒察ノ上此航路ヲ以テ特ニ國ニ郵便定期運搬御用

被仰付從ノ相席ノ助成金御下付社或下度亦ニ甚金額  
 一航海獎勵法ト合様ノ額ニ御莫定相成別ニ船舶加給  
 通城ノ法ニ據ラズ向後十五ヶ年間一定ノ助成金ヲ御  
 支給被仰下度此限奉願云也

明治三十一年九月 日

東洋汽船株式會社社長

浅野 總一印

逓信大臣林有造殿

東洋汽船會社汽船件名書

一寸法

全長

幅

深

上甲板ヨリ船橋樓甲板迄之高

噸數

總噸數

登簿噸數

一製造地

一外板材料

一船骨材料

四百拾貳呎

五拾貳呎六吋

參拾貳呎七吋

七呎拾吋

凡六千噸

凡參千八百噸

英國サレガノラド及ニエーカウ

スエーデンタイ

鋼 鋼

一甲板

層数  
種類

四  
正甲板、上甲板、船橋甲板  
板、フレーム、ドック、

一全部二重底

一汽機

三聯成表面汽機、レシヤ汽機、輕ハ貳拾八吋  
四分、一、四拾八吋、及七拾五吋、レシヤ其行長四拾  
八吋トス

一汽鐘

西端汽鐘四個、ト岸端汽鐘壹個、ト備、前者ハ徑  
拾五吋、六吋、長拾八吋、レシヤ後者ハ徑拾五吋、六吋  
長拾六吋、六吋、トシテ其壓力ハ兩者共ニ自然通

風、於、百ハ拾封土トス

一推進器

雙螺旋

一馬力

實馬力凡七千五百以上

一速度

拾七海里餘

一搭載旅客數

上等 九拾餘名  
中等 貳拾餘名  
下等 壹千名

一旅客、待遇、周スル設備

一、客室、上等船客、客室ハ船橋甲板上、在リ中等  
船客、客室ハ船尾甲板、在リ共ニ其構造完美  
ヲ尽シ、空氣ノ流通殊ニ宜シ  
二、食堂、上等船客、食堂ハ船橋、設テ、其裝飾

頗々美麗、シラ廣闊ナリ、中等船客ノ食堂ハ船尾樓ニアリ  
 三、音楽室、吸烟室、貴婦人室其他旅客ノ娯樂ヲ資スル諸般ノ準備ハ悉ク具備シテ船橋甲板ノ上部ニアリ

一、郵便物、絹布及正金其他ノ貴重品ヲ入ル、為メニ堅封水密ヲ施シタニ室アリ  
 一、旅客ノ食品、充分ナル積込ノ食品ヲ入レ冷却機ヲ備ヘタニ貯藏室アリ  
 一、落成期及廻航期

日	本	丸	落成期	廻航期
明治三十一年八月	同	年九月	同	年十一月
同	年九月	同	年十一月	同

香港丸 同 年 十月 同 年 十二月  
 右之通候也

海軍大臣

明治 年 月 日 内閣書記官

内閣總理大臣

内閣書記官長

外務大臣

西

大蔵大臣

西

海軍大臣

権

文部大臣

云

逓信大臣

西

内務大臣

西

陸軍大臣

西

司法大臣

区

農商務大臣

収

別紙逓信大臣請儀ノ件ヲ系スルニ日本郵船株式  
會社香港シヤトル線ニ使用スル船舶ノ総噸數ハ同  
社ノ請願ニ由リ六千噸ニ改メ度シト謂フニアリ  
本月十日閣議ノ決定ハ三千五百噸以上トアリテ敢テ